

首里当蔵旧水路

—龍潭線街路整備に伴う発掘調査報告書—

令和2（2020）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



卷頭図版 1 首里当蔵旧水路調査区近景（東より）



卷頭図版 2 首里当蔵旧水路周辺遠景（上空北より）



卷頭図版 3 首里当蔵旧水路調査区全景（上空西より）

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが沖縄県土木建築部より予算分任を受けて、平成 29 年度に実施した龍潭線街路整備に伴う首里当蔵旧水路の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の調査は、沖縄県土木建築部による龍潭線街路整備事業の一環である龍潭北岸の擁壁工事に伴うもので、検出された遺構・遺物について記録保存調査を行ったうえで、取り壊される予定でした。

しかし、調査で検出された水路遺構が良好に残存していたことから、戦前さらに琉球王国時代の様子を偲ぶ遺構として、沖縄考古学会などの研究者によりその重要性が指摘され、県民からも保存を強く求める声が多くあがりました。

そこで、関係機関と協議を行った結果、水路遺構は現地で埋め戻すことにより保存することになりました。現在、この水路遺構をどのように保存活用して、街路整備を進めていくかについて関係者により検討されているところです。

本報告書では、調査で確認された水路遺構を中心にその成果を掲載しており、今後の保存活用に寄与することを目的としております。なお、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として利用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

2020（令和2）年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 城田 久嗣

例　　言

1. 本報告書は、沖縄県土木建築部による龍潭線街路整備事業に伴う首里当蔵旧水路の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本発掘調査及び資料整理業務は、沖縄県土木建築部と沖縄県教育委員会が協定を交わし、沖縄県教育庁文化財課の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、現地調査を平成 29 年 12 月 5 日より平成 30 年 1 月 31 日まで、資料整理作業・発掘調査報告作成を令和元年度にそれぞれ実施した。
4. 現地調査及び資料整理においては、以下の方々にご指導・ご協力を戴いた（所属は当時。所属・名前の五十音順）。
沖縄県立博物館・美術館（外間一先・山崎真治）
沖縄考古学会（池田榮史・上原靜・江上幹幸・後藤雅彦・嵩原安智・當真嗣一・宮城弘樹・森達也）
那覇市文化財課（玉城安明・當銘由嗣・仲宗根啓・樋口麻子）
5. 本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第 XV 座標系）を使用し、世界測地系で表示している。
6. 本書の執筆・編集は、当センター職員の協力のもと瀬戸哲也が行った。
7. 本書に掲載した写真は、本調査区の発掘調査状況を瀬戸哲也・太田樹也、堤浩一郎（株式会社埋蔵文化財サポートシステム）、遺物を領家範夫・伊禮若奈が撮影した。なお、立会地点の発掘調査状況については、株式会社アーキジオが撮影した。
8. 発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

卷頭図版

序

例言

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	8
第3節 調査の経過	8
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の方法と成果	17
第1節 調査の方法	17
第2節 層序	19
第3節 遺構	22
1. 本調査区	22
2. 立会地点	38
第4節 遺物	39
1. II層出土遺物	39
2. I層出土遺物	40
第4章 総括	47
参考・引用文献	48
図版	49
報告書抄録	

卷頭図版目次

- 卷頭図版1 首里当蔵旧水路調査区近景
卷頭図版2 首里当蔵旧水路周辺遠景
卷頭図版3 首里当蔵旧水路調査区全景

挿図目次

第 1 図	龍潭線街路と調査区	1	第 28 図	サブレンチ 1 平面・断面	23
第 2 図	平成24年度工事立会状況	2	第 29 図	II 層堆積状況	23
第 3 図	平成27年度那覇市文化財調査状況	2	第 30 図	サブレンチ 2 平面・断面・立面	23
第 4 図	調査経過状況写真(1)	3	第 31 図	水路遺構実測図(1)	24
第 5 図	調査経過状況写真(2)	5	第 32 図	水路遺構オルソ画像(1)	25
第 6 図	調査経過状況写真(3)	6	第 33 図	水路遺構実測図(2)	26
第 7 図	調査経過状況写真(4)	7	第 34 図	水路遺構オルソ画像(2)	27
第 8 図	沖縄県と那覇市の位置	9	第 35 図	水路遺構実測図(3)	28
第 9 図	首里当蔵旧水路調査位置	10	第 36 図	水路遺構オルソ画像(3)	29
第10図	調査区と龍潭	11	第 37 図	水路遺構実測図(4)	30
第11図	龍潭石垣等遺構(1)	12	第 38 図	水路遺構オルソ画像(4)	31
第12図	龍潭石垣等遺構(2)	13	第 39 図	水路遺構実測図(5)	32
第13図	龍潭周辺往年の状況写真	14	第 40 図	水路遺構オルソ画像(5)	33
第14図	龍潭周辺現況写真	15	第 41 図	水路遺構実測図(6)	34
第15図	首里当蔵旧水路周辺の主な遺跡	15	第 42 図	水路遺構オルソ画像(6)	35
第16図	明治初年頃の大溝(ウブンジュ)	16	第 43 図	水路遺構石積み細部	36
第17図	1700年作成首里古地図	16	第 44 図	降雨時の水路内滯水状況	36
第18図	路面に覆われた水路遺構	17	第 45 図	立会地点検出水路遺構実測図	37
第19図	サブレンチ2調査後の床石復旧状況	17	第 46 図	立会地点検出水路遺構オルソ画像	38
第20図	水路遺構を覆うコンクリート製暗渠	17	第 47 図	サブレンチ2のガラス製品出土状況	39
第21図	東側付近に現存する水路遺構	17	第 48 図	II 層出土遺物	39
第22図	調査区と周辺現況	18	第 49 図	I 層・床面上出土遺物(1)	41
第23図	調査区全貌上空写真	19	第 50 国	I 层・床面上出土遺物(2)	42
第24図	床面付近鉄貨出土状況	19	第 51 国	出土瓦	43
第25図	水路遺構全体オルソ画像	20	第 52 国	首里当蔵旧水路の位置	47
第26図	水路遺構全体オルソ画像	21	第 53 国	龍潭沿いの水路か	48
第27図	水路遺構の細部呼称	22	第 54 国	中城御殿正門から見える石積み	48

表目次

第 1 表	陶磁器類出土数	40	第 4 表	遺物観察一覧(1)	45
第 2 表	その他の遺物出土数	42	第 5 表	遺物観察一覧(2)	46
第 3 表	瓦出土数	44			

図版目次

図版1	龍潭と首里当蔵旧水路	49	図版9	水路遺構中央部	53
図版2	中城御殿跡と首里当蔵旧水路	49	図版10	水路遺構石積み(1)	54
図版3	調査区全景空中写真	50	図版11	水路遺構石積み(2)	55
図版4	調査区中央部空中写真	50	図版12	サブレンチ2	56
図版5	調査区近景(1)	51	図版13	平成29年度工事立会地点水路遺構	57
図版6	調査区近景(2)	51	図版14	出土遺物(1)	58
図版7	水路遺構近景	52	図版15	出土遺物(2)	59
図版8	水路遺構床面	53	図版16	出土遺物(3)	60

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

今回の調査対象となった首里当蔵旧水路が位置する龍潭線街区は県道29号線の一区間にあたり、那覇市泊から北中城村安谷屋とを結ぶ主要地方道である（第1図）。この道路は交通量が多いのにに対して、幅員が狭く不便な区間があることから、その改善のために各区間で整備・改良事業が行われている。特に首里城北側の山川交差点から鳥堀交差点に至る区間である龍潭線は、住宅が密集すると共に観光地として車両・通行人など交通量が非常に多いため早急の対応が求められており、沖縄県土木建築部（以下、県土建部）によって街路整備事業が継続して実施してきた。

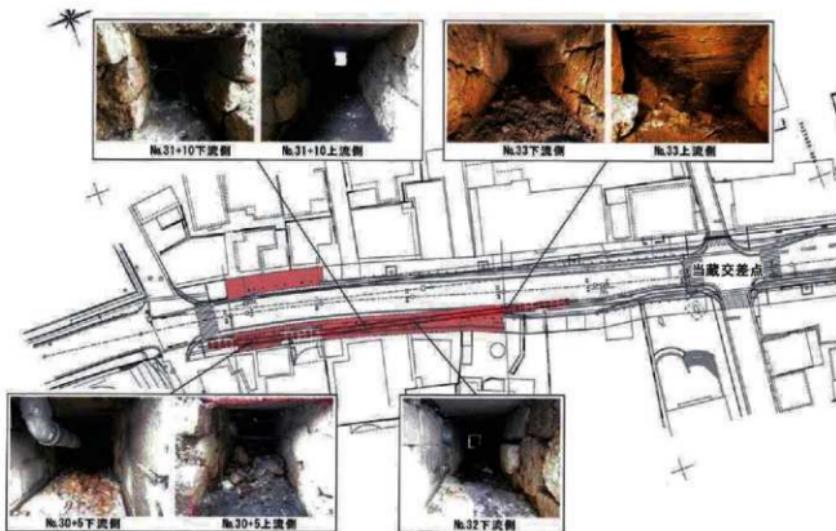
平成24年度に、沖縄県南部土木事務所（以下、南部土木）による龍潭線街区事業に伴う改良工事が、南側歩道において当蔵交差点から龍潭側に西へ約50mの地点から幅2m、長さ60mの範囲で計画された（第2・9図）。その掘削工事中に、コンクリート製暗渠に覆われる形で石積みによる水路遺構が発見されたため、沖縄県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に連絡された。県文化財課職員が現地確認を行ったところ、水路遺構は工事範囲の各所で残存していたが、壁面の石積みがコンクリートブロックやパイプ管などで破壊されている箇所も多く見られた。そのため遺構の残存状況は不良であり、現代の暗渠と重なっていることからも時期的に新しいものと判断して、工事の継続を認めた。本工事では、歩道を整備する際に立会で確認された水路遺構の位置を周辺とは異なるタイルで表示された（第4図1）。

平成25年度には、先の範囲より東へ約200mの首里交番にかけて南部土木による同工事が計画され（第3・9図）、那覇市文化財課（以下、市文化財課）が工事進捗に合わせて複数回の立会を実施した。その結果、前回工事と同様な状況で水路遺構が確認されたが、石積みが1m近く見られる部分や床石も残っている部分があることから、遺構は広範囲に残存していることが想定された。この水路遺構は、龍潭の北端から首里公民館付近に戦前まであった蓮小堀（リングムイ）に続くものと推測し、平成26年度に「首里当蔵旧水路」として新規の埋蔵文化財包蔵地として沖縄県教育長あてに報告した。市文化財課は南部土木と協議し、遺構が確認された範囲で工事の影響を受ける箇所において記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。ただ、市と県の間で契約を交わすとなると工事開始に間に合わないことから、調査については南部土木が直接民間の発掘調査業者へ委託し、市文化財課が調査監理を行ったうえで調査報告書を作成することで三者協定が締結された。平成27年度に委託を受けた株式会社アーキジオが現地作業を担う形で発掘調査が実施され、市文化財課がその成果をまとめた調査報告書が刊行された（第3図、第4図2 那覇市2017）。

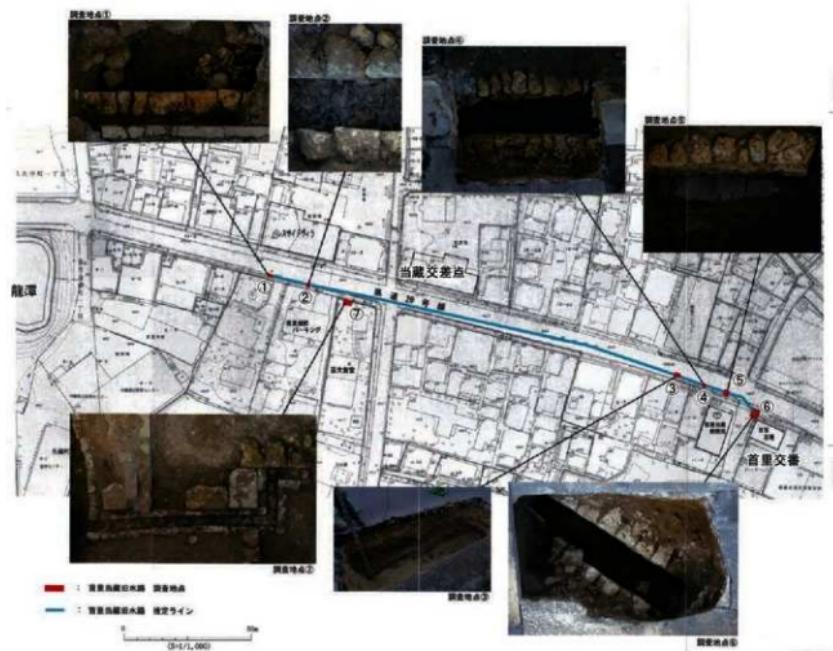
平成29年度に入ると、南部土木は街路整備の一環として龍潭北側擁壁の改良工事を計画し、県指定史跡「龍潭及びその周辺」に及ぶため、5月21日付けで現状変更申請を市文化財課経由で県教育長に提出し、6



第1図 龍潭線街区と調査区



第2図 平成24年度工事立会状況（沖縄県土木建築部道路街路課提供図より加筆）



第3図 平成27年度那覇市文化財調査状況（那覇市2017より加筆）



1. 平成 24 年度工事立会地点現況



2. 平成 27 年度那覇市文化財調査地点現況



3. 平成 29 年度工事立会状況（1）



4. 平成 29 年度工事立会状況（2）



5. 平成 29 年度調査地点遺構不時発見状況



6. 平成 29 年度調査地点重機掘削状況



7. コンクリート製暗渠の除去作業状況



8. コンクリート製暗渠除去後の水路構造

第 4 図 調査経過状況写真（1）

月 12 日付けで許可された。一方、その工事では県史跡範囲外である龍潭線南側歩道でも掘削が必要となった。そこで、市文化財課が立会を行ったところ、コンクリート製の暗渠に覆われた石積みの水路が発見され、該当する歩道全域にわたって良好に残存していることが想定された（第 4 図 5）。それを受け南部土木は、文化財保護法第 97 条に基づいて工事による遺跡の不時発見として、平成 29 年 9 月 12 日付けで県教育長あてに国土第 1502 号で通知を行った。県教育長は 9 月 21 日付け教文第 879 号で、記録保存を目的とした発掘調査を南部土木へ指示した。

しかしながら、南部土木が早急に工事を進めるために本年度中の調査実施を要求する中、市文化財課は現行体制では困難であるとした。それを受けた県文化財課は南部土木と協議を行い、本工事範囲においては県土建部からの分事業として当センターが発掘調査を実施することを決定した。本年度の予算については委託費しか分任できないということと当センターの調査体制を検討した結果、現場業務については職員が常駐した上で民間調査業者へ発掘調査支援業務として委託することにした。また、資料整理・報告書作成業務については次年度予算の計上が間に合わないということで、平成 31（令和元）年度予算としてセンター直営で実施できるよう整理員報酬、調査報告書の印刷製作・発送料等を計上した。これらの内容をまとめて、県土建部長と教育長は 10 月 24 日付で「龍潭線街路整備事業の施行に伴う埋蔵文化財調査に関する協定書」を交わした。

一方、平成 24 年度に工事未着手の範囲では、平成 29 年 8 月に掘削工事が行われたところ水路遺構が確認された。県文化財課は工事立会を行い、南部土木より委託させた株式会社アーキジオによる遺構清掃・記録作業が 9 月 7 ~ 11 日に行われ成果品が提出された（第 4 図 3・4）。この成果についても本報告書で掲載している。

さて、今回の調査区については、平成 29 年 9 月末から 10 月初めにかけて、工事業者によりバックホウで路面とコンクリート製暗渠を当センター職員立会のもと除去し、人力で削岩機によって水路遺構の大部分を露出させた（第 4 図 6 ~ 8）。ただ、毎年 11 月 3 日に行われる首里城祭に備えて、これらの遺構は土囊と鉄板により養生されて、再度埋め戻して一時的に歩道の路面に復旧された（第 5 図 1）。当センターは、予算令達後に発掘調査支援業務の指名競争入札を行い、落札した株式会社埋蔵文化財サポートシステムにより現場業務の準備を整えた。また、調査事前には南部土木と調査方法・期間について調整する際に、これまで行われた調査区では狭小であったことから一般公開できなかったことを踏まえて、当センターでは原則的に行っていける県民への公開を目的とした現地説明会を、今回の調査でも実施する予定についても説明して了解を得た。

当センターは発掘調査を平成 29 年 12 月 4 日に開始することになり、文化財保護法第 99 条第 1 項に基づいて 12 月 6 日付け埋文第 505 号で県教育長あてに着手報告を行った。調査開始の約 1 週間前から工事業者により一時的に復旧された歩道の除去作業が開始され、その終了範囲から支援業者の作業員により人力で水路遺構の調査を進めていった。調査は長さ約 60 m の水路遺構を露出させたまま実施したので、すぐに住民や観光客や当センターの職場体验生などから注目を浴びた。その中でも、沖縄考古学会は調査着手後もなく調査現場や県文化財課や県土建部へ来訪し、遺構の重要さを指摘した上で慎重に調査を進めるとともに現地保存も含めて街路整備の再検討などについて意見が出された。県文化財課はその動きを受けて南部土木と主管課である県道路街路課（県街路課）に、調査により想定した以上に遺構が良好に残存していることを報告した上で、現地保存を含めた工事の計画の再検討について協議を行った。県街路課は、一部の遺構についての保存は考慮してみるが、長年継続している現行の計画を変更することは現時点では困難だという回答を行っていた。

以上のように、記録保存を目的とした調査が進行していく中で、当初から予定していた現地説明会を 12 月 23 日に開催したところ、310 名が訪れて琉球王国時代をしのぶ遺構として注目を浴びることになった。その反響は、連日県内の新聞・TVなどのマスコミによって報道されることになり、平成 30 年 1 月ごろにかけて県民の意見が新聞などに取り上げられ、また国・県・市・議会議員なども視察に訪れるようになった。その意見としては、本街路の改良整備は必要であることは前提として、首里という地域の中で歴史的な遺構も重要なので現状保存する方策を図り、さらにそのまま見学などの利活用ができるような道路づくりを行うべきという考えが大半であった。また、沖縄考古学会は 12 月 27 日付け文書で、県教育長と県土建部長あてに「首里当蔵旧水路の保存と活用について」として、遺構の現地保存を含めた活用を要請した。

これらの世論を受けて平成 30 年 1 月には、県文化財課と県街路課など関係部署との協議が行われ、今回の



1. 調査前仮設歩道



2. 水路造構再露出作業



3. 水路造構清掃状況



4. デジタル写真測量状況



5. 写真撮影状況



6. 県文化財課との現地調整状況



7. 職場体験の学生への説明



8. 現地説明会を広告する横断幕

第5図 調査経過状況写真（2）



1. ドローンによる空中写真撮影状況



2. 現地説明会



3. 議員・土木建築部への調査状況説明



4. 沖縄考古学会の現場観察



5. 那覇市文化財課への調査状況説明



6. サブトレンチ掘削前の不発弾等確認のための磁気探査



7. サブトレンチ範囲の床石一時撤去前



8. サブトレンチ掘削状況

第6図 調査経過状況写真（3）



1. サブトレーンチ周辺養生状況



2. 調査区埋め戻し状況



3. 調査終了後歩道整備状況



4. 調査区周辺に設置した調査成果をまとめた横断幕



5. 支援業務委託成果品



6. 資料整理作業状況

第7図 調査経過状況写真（4）

水路遺構については最低限の調査を行った後、工事を中止し現状で埋め戻すことにより保護したうえで、再度工法の検討を行う方向性が確認された。しかし、県街路課より現状保存に切り替わったので、資料整理・報告書作成費は道路事業費ではなく文化財側が負担すべきという疑義が出された。県文化財課は文化庁記念物課などに問い合わせて、記録保存調査において方針が転換して現地保存に至った場合でも、その分の資料整理費は原団体負担することが通例であることを確認して、県街路課に理解を求めて最終的に了解が得られた。

現地調査については平成30年1月31日に終了させて、同日付け埋文第589号で県文化財課長あてに終了報告を行った。同時に、本調査で得られた収納コンテナ2箱の出土遺物について埋文第590号で報告し、それを受けた文化財課は2月9日付け教文1509号で、那覇警察署に埋蔵文化財の発見通知を行った。

そして調査後には、速やかに工事業者により遺構を保護した上で埋め戻され、歩道として再整備された。当センターでは遺構の活用の一環として、調査概要をまとめた横断幕を作成して復旧された歩道の柵に設置することで、本遺構の周知を図っている。

第2節 調査体制

首里当蔵旧水路の発掘調査は、当センターが沖縄県教育委員会、教育庁文化財課の指導の下に平成29年度に現地調査、令和元（平成31）年度に資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

事業主体 沖縄県教育委員会 平敷昭人（教育長）

事業主管 沖縄県教育庁文化財課 萩尾俊章（課長、29年度）、濱口寿夫（同、元年度）、上地博（記念物班長、29年度）、仲座久宜（同、元年度）、羽方誠（主任専門員）、宮城淳一（主任、元年度）

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター 金城亜信（所長、29年度）、城田久嗣（同、元年度）

調査班 総括…仲座久宜（班長、29年度）、中山晋（同、元年度）

調査担当…瀬戸哲也（主任専門員）、宮城淳一（専門員）

調査協力…太田樹也、仲嶺真太（史跡・埋蔵文化財調査員）

整理担当…瀬戸哲也（主任専門員）

整理補助…安里綾子・儀間真章・工藤孝美・領家範夫

整理協力…上原園子・小渡直子・嘉数渚・宮城かの子（埋蔵文化財資料整理員）

発掘調査支援業務委託（29年度） 株式会社埋蔵文化財サポートシステム

堤浩一朗（調査員）、中村耕治（調査補助員）

多々良正人・亀島正・喜屋武志保（実測員）

第3節 調査の経過

発掘調査から資料整理作業を経て、本調査報告書の刊行に至る経過は以下のとおりである（第5～7図）。

発掘調査

第1節で記述したように、工事業者により遺構が露出された後の進捗について記す。

12月 4日 調査着手、水路遺構の清掃と共に図化のための写真測量実施

12月 11日 龍潭側の壁面が北面だけでなく南面もあり、両面積みになっていることを確認

12月 12日 サブトレイン1において石積の下層に造成土があることを確認

12月 22日 水路遺構の清掃を終了させ、遺構及び周辺の空中写真撮影

12月 23日 現地説明会開催、310名来訪

1月 10日 サブトレイン2において床石より下面の造成土および石積みを検出し、銭貨等の出土遺物から18世紀後半から19世紀代の構築である可能性を確認

1月 18日 サブトレイン1・2や両面積みの範囲などについて遺構を保護しながら埋め戻し養生

1月 30日 写真測量が終了し、図面の最終確認を行い完成

1月 31日 片づけを行い、現場調査終了

資料整理作業

本調査では、株式会社埋蔵文化財サポートシステムより遺構図や写真については支援業務による成果品として、平成30年3月に当センターの検査を行った後に納品されていた。一方、資料整理については第1・2節で述べたように、令和元（平成31）年度に実施することになっていた。

令和元年度に入ってから、遺物の洗浄・ナンバリング・実測・写真撮影・デジタルトレースを一貫の流れで行った。遺構図は支援業務においてデジタルトレースにより納品されており、当センターで表現等の調整を行った。このような整理作業を経て作成した遺構・遺物実測図等は、当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてデジタルトレース及びレイアウトを行った。その後、写真や文字原稿も含めて編集ソフト（インデザイン）を用いてD P T印刷用の編集を行い、最終的には全てP D Fファイルとして作成した。その後、過去の実績から印刷製本の積算を行い、5者による見積もありわせを経た上で最安値を提示した有限会社べんざんへ入稿した。1回の校正を経て3月 25日に300部を印刷・刊行し、年度中に事業関係部局、文化財の調査活用のため県内外の図書館・教育委員会・学校・埋蔵文化財関係機関に発送することで、全業務を終了させた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

首里当蔵旧水路は、那覇市首里当蔵1丁目から首里真和志1丁目にかけて位置する。今回の調査区は県道29号（龍潭線）南側歩道で、龍潭北側に接する地点となり真和志1丁目地内にあたる。人工池である龍潭の南側には首里城が位置し、標高100m前後の丘陵上に築かれた県下最大規模のグスクで、東西410m、南北270m、面積約46,000m²を誇る。その東側に那覇市の最高所（標高165.7m）である弁ヶ嶽がそびえ、多くの河川が首里城を取り巻くように配されるなど、優れた風水思想に基づいた王都に相応しい環境が整えられている。この丘陵の南側には、安里川の浸食により比高差70～80mの比較的急な斜面が形成され、地形を利用した掘り込み式の古墓が点在している。

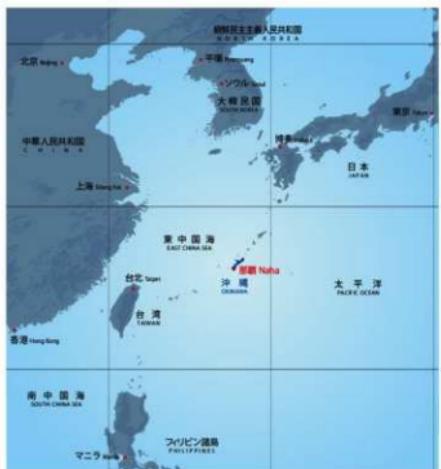
首里城周辺の地質の特徴として、琉球石灰岩とその風化土とされる明褐色土（マージ）の下層に新第三紀鮮新世の砂岩（ニービー）・泥岩（クチャ）からなる島尻層群が基盤となっている点が挙げられる。標高が高い首里城側は透水性の高いマージ及び石灰岩盤となっており、それより低くなっている首里当蔵旧水路及び龍潭一帯は不透水層であるクチャが地山層と確認されている。つまり、標高が高く水を通しやすい首里城側の水が、西方の東シナ海に向かって標高が低くなる始点である龍潭を含めた調査区一帯に流れ込んでくるという地形となっている。

第2節 歴史的環境

首里当蔵旧水路は、平成27年度の那覇市文化財課の発掘調査により、首里公民館敷地から龍潭にかけての現在の県道29号線沿いに位置することが想定されてきた（那覇市2017）。

龍潭は、琉球国を統一した尚巴志の国相であった明人の懐機が1427年に、首里城の外苑としてその北側に作庭した人工池で、魚小堀（イユグムイ）とも称される。この龍潭は周囲416m、面積7,574m²、南北の長さ約210m、東西の最大幅が約140mであるが南に向かって狭くなり最奥は約20mとなる。1955年に歴史的な名勝地として琉球政府指定史跡となり、現在は「龍潭及びその周辺」として沖縄県指定史跡である。

ちなみに、中国などの中華圏には、龍潭と称される地名や池泉が各地で見られ、「潭」は中国語で池を意味



する字である。例えば、世界遺産に登録されている雲南省麗江市に位置する宋代の市街地の建築物である麗江古城の近辺に見られる周囲4kmの泉は、黒龍潭と称されている。

さて、首里城周辺では降雨時などの水は、城内の龍樋などを通ってまず円鑑池に流れ、1502年築造とされる龍淵橋のアーチをくぐり龍潭に注



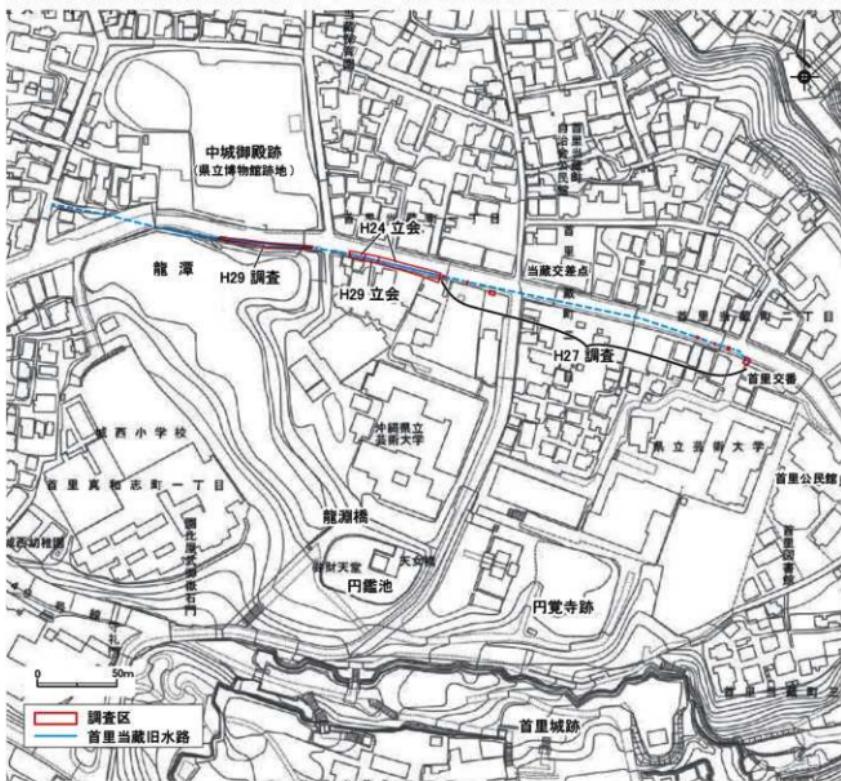
第8図 沖縄県と那覇市の位置

がされることになる（第9・10図）。その龍潭に溜まった水は、北端に戦前まであった世持橋のアーチとなっている水門から、大溝（ウフンジュ）と称されている現在は暗渠となっている水路に放出させることができた（第14図4）。この大溝は明治初年頃の景観図に描かれており（第16図）、水の流れはかつてあった井泉である山川極川^{ヤマツチガワ}から真嘉比川へつながり、安里川を通り泊港に至るとされる。

龍潭では近世期には3回の浚渫が行われ、これらは各王の冊封に備えたもので、4万人にも上る石工を含めた夫役が徵発されたという記録がある。近代に入ると、1915年には沖縄電気軌道により釣り場などが設けられ遊園地となつたことも一時あったり、1936・1942年には首里市民らにより池底の清掃などが行われた。戦前の龍潭周辺については幾つか写真が残されており（第13図1・2）、1901年刊行『日本名勝地誌』に掲載されたものなどが古い部類と思われる。

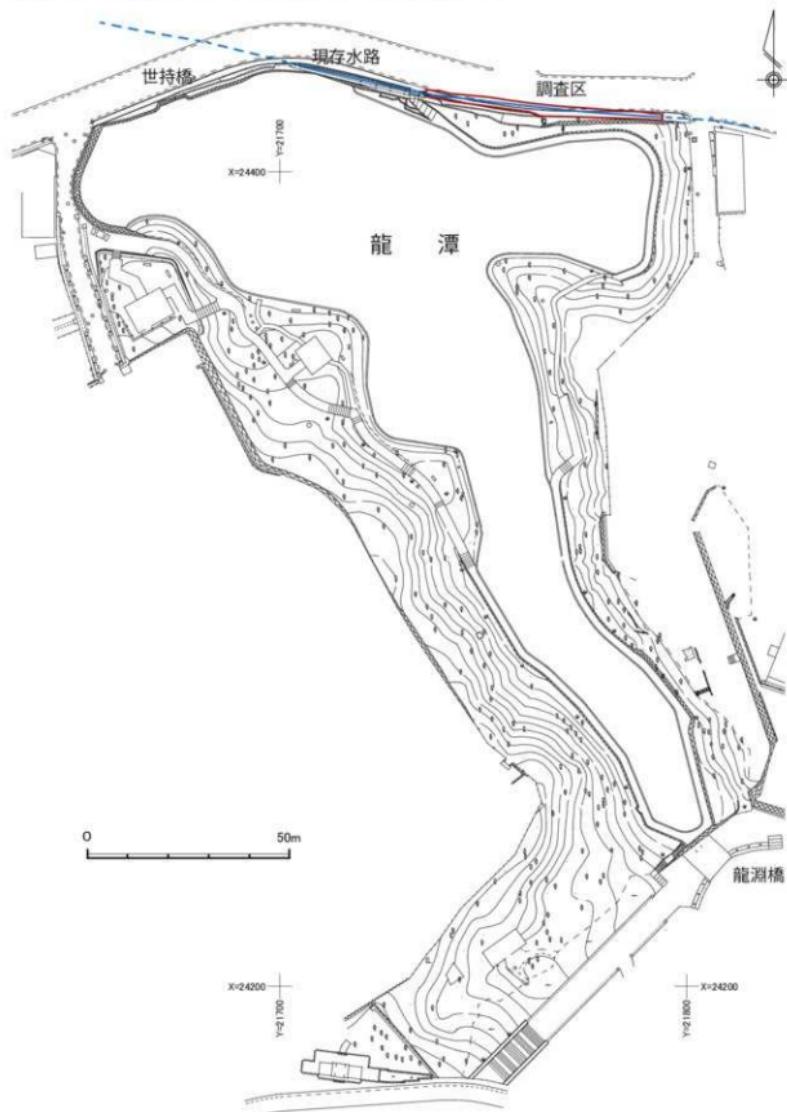
その後、1945年の沖縄戦では、首里城や近接する中城御殿などと共に、龍潭の石垣も大きな破壊を受けた（第13図3）。戦後は、1955年に那覇市による池の縁に石積を設けられ、公園として利用された（第13図4）。その後1992年には、沖縄県によって龍潭の浚渫と合わせて、龍淵橋や龍潭北側の石垣や階段などが発掘調査されており、確認された遺構を一部生かす形で公園整備が行われた（沖縄県 1995、第11・12・13図5～8）。現在は概ねその状況を維持しており、後述する世持橋付近へ続く水路も現存している（第14図1～3）。

なお、首里当蔵旧水路が現時点で確認されている東端は現在の首里公民館敷地であるが、この場所は1958年に埋められた人工池である蓮小堀（リングムイ）であった（第17図）。この蓮小堀は龍潭と同様に15世紀

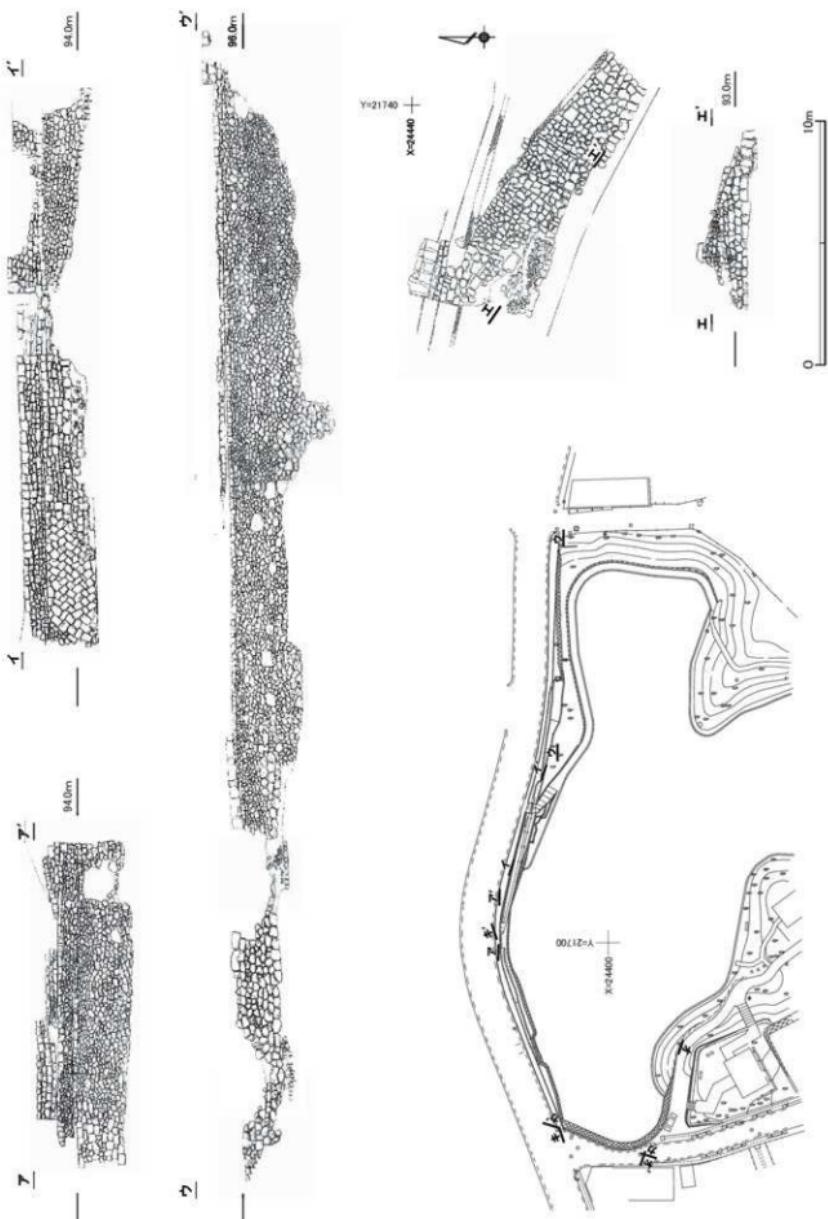


第9図 首里当蔵旧水路調査位置

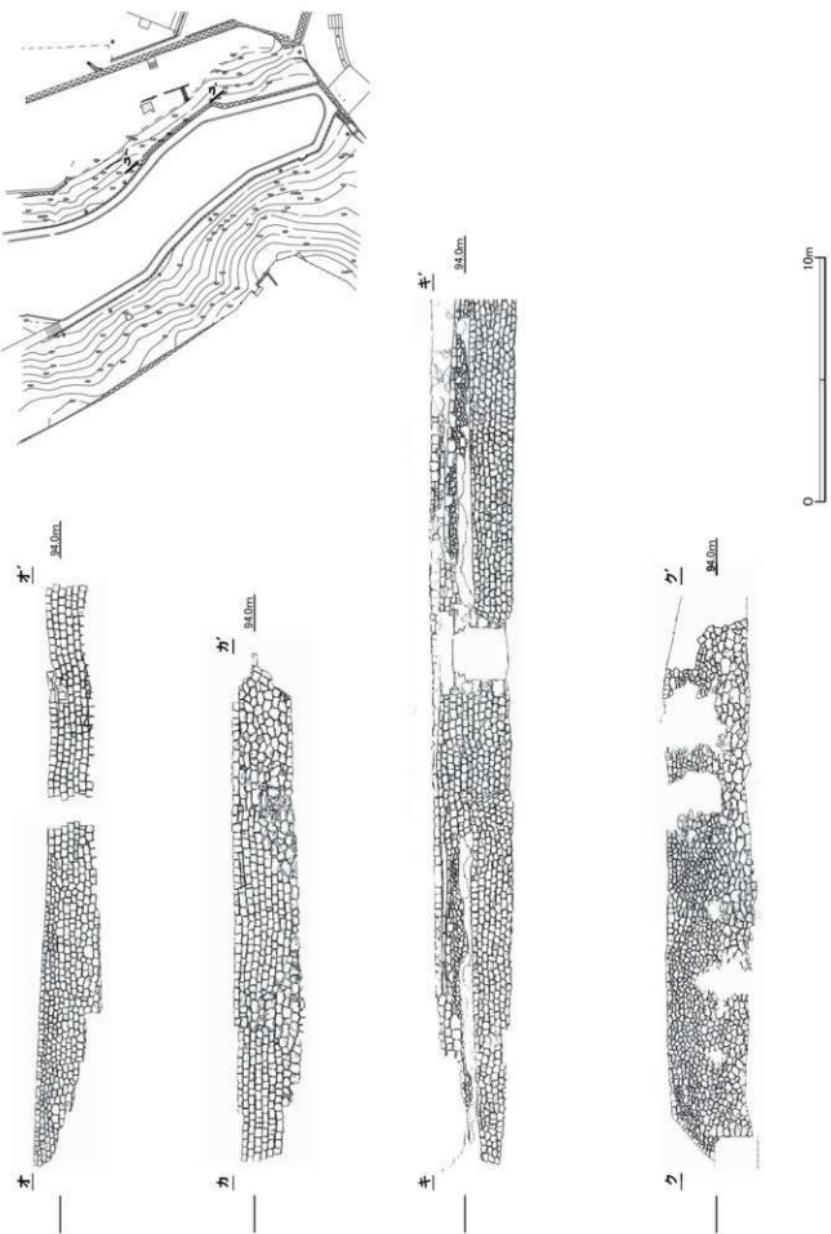
代に作られたとされており、近接して元々歴代諸王の廟であった慈恩寺があり、先述の世持橋はここにあった橋を 1661 年に移されたものとされる。また、龍潭北側に位置する中城御殿跡は県立博物館跡地にあるが、1870 年着工、1873 年に竣工されたものである。本節は、主に次の文献（沖縄県立博物館 1992、沖縄タイムス社 1983、角川書店 1986、平凡社 2002）を参考に記述した。



第 10 図 調査区と龍潭



第11図 龍澤石垣等遺構（1）（平成3年度調査時点、沖縄県教1995より改変）



第12図 龍澤石堰等遺構（2）（平成3年度調査時点、沖県教1995より改変）



1. 龍潭北側周辺（田山 1901）



2. 中城御殿付近・戦前撮影（沖縄県立博物館・美術館蔵）



3. 龍潭橋周辺・1945年6月8日撮影（沖縄県公文書館蔵）



4. 世持橋付近・1961年撮影（沖縄県公文書館蔵）



5. 世持橋から本調査区周辺・1991年度撮影



6. 龍潭北側階段・1991年度撮影



7. 龍潭北側石垣・1991年度撮影



8. 本調査区周辺の龍潭沿い歩道・1991年度撮影

第13図 龍潭周辺往年の状況写真



1. 龍潭北側現況



2. 龍潭北東端本調査区周辺石垣現況

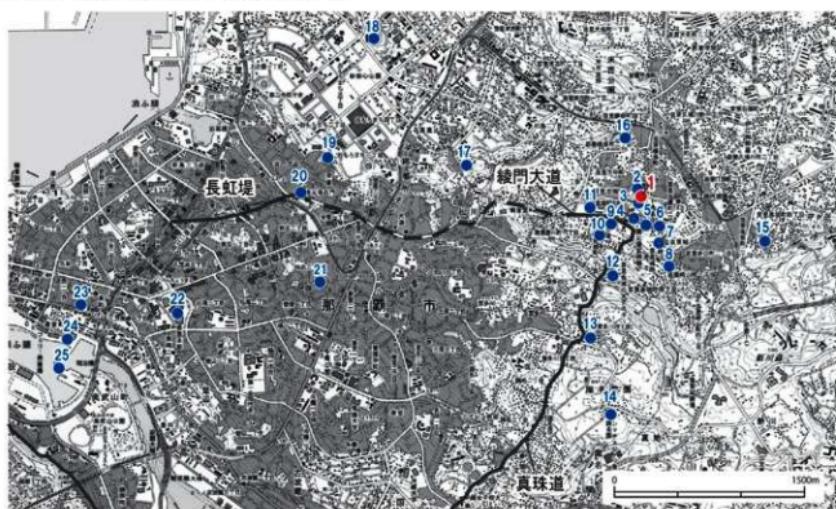


3. 本調査区西端より世持橋へ続く水路遺構

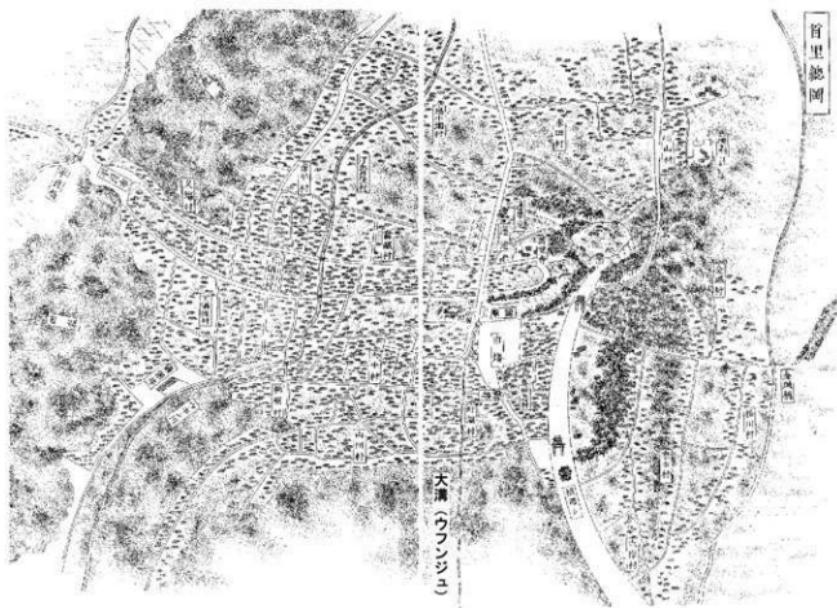
第14図 龍潭周辺現況写真（2017年度撮影）



4. 世持橋北側から西へ続く暗渠（大溝・ウフンジュ）



第15図 首里当蔵旧水路周辺の主な遺跡



第16図 明治初年頃の大溝（ウフンジュ）（伊地知定馨 1877『沖縄志』所収より）



第17図 1700年作成首里古地図（嘉手納 1970より）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

本調査区は、龍潭北側擁壁工事の影響を受ける龍潭線街路南側歩道に設定され、全面に水路遺構が検出されることになった（第22・23図）。この水路遺構は、現行路面のアスファルトと路盤材を除去すると、コンクリート製暗渠に覆われていた。この暗渠のコンクリートは厚さ約10cmで、これを除去すると石積みの水路遺構が全面に残存していることが確認された（第18図）。そこで、県文化財課と南部土木との協議により、水路遺構を覆っているコンクリートは、工事業者によりあらかじめ除去する方向となつた（第4図6～8）。なお、調査区は龍潭北側擁壁と接する歩道の長さ約60mに沿って設定され、最終的に168m²の調査面積となつた。

暗渠が除去されたのち、当センターが発注した支援業者の埋蔵文化財サポートシステムにより、石積み水路の床面・壁面に剥ぎ残されたコンクリートや、床面の石の隙間に溜まった土砂を除去し清掃することから始めて、写真測量による実測、写真撮影などの記録作業を行つた（第5図3～5）。また、調査中に本遺構が現状保存されることになったが、遺構の構築方法や時期などの最低限の情報を得るために、2か所のサブレンチを設定し（第6図6～8）、調査後は取り外した床石なども原状に戻したうえで埋め戻しを行つた（第19図）。

一方、本調査に先駆けて平成29年9月7～11日に、本調査区東端より東へ30m離れた県道29号線の南側歩道内で立会調査が行われた。これは、県文化財課の指導のもと工事業者により発注された株式会社アーキジオが遺構記録を行つたものである（第4図3・4）。この調査については立会地点と称して、アーキジオにより提出された成果報告書に基づき、その内容を報告する。

本調査で得られた遺物のナンバリングは、「当水（地点・層名）」として、地点はアルファベットによる記号、層名が記されていないものは全て1層からの出土という意味である。なお、立会地点では遺物は得られていない。



第18図 路面に覆われた水路遺構



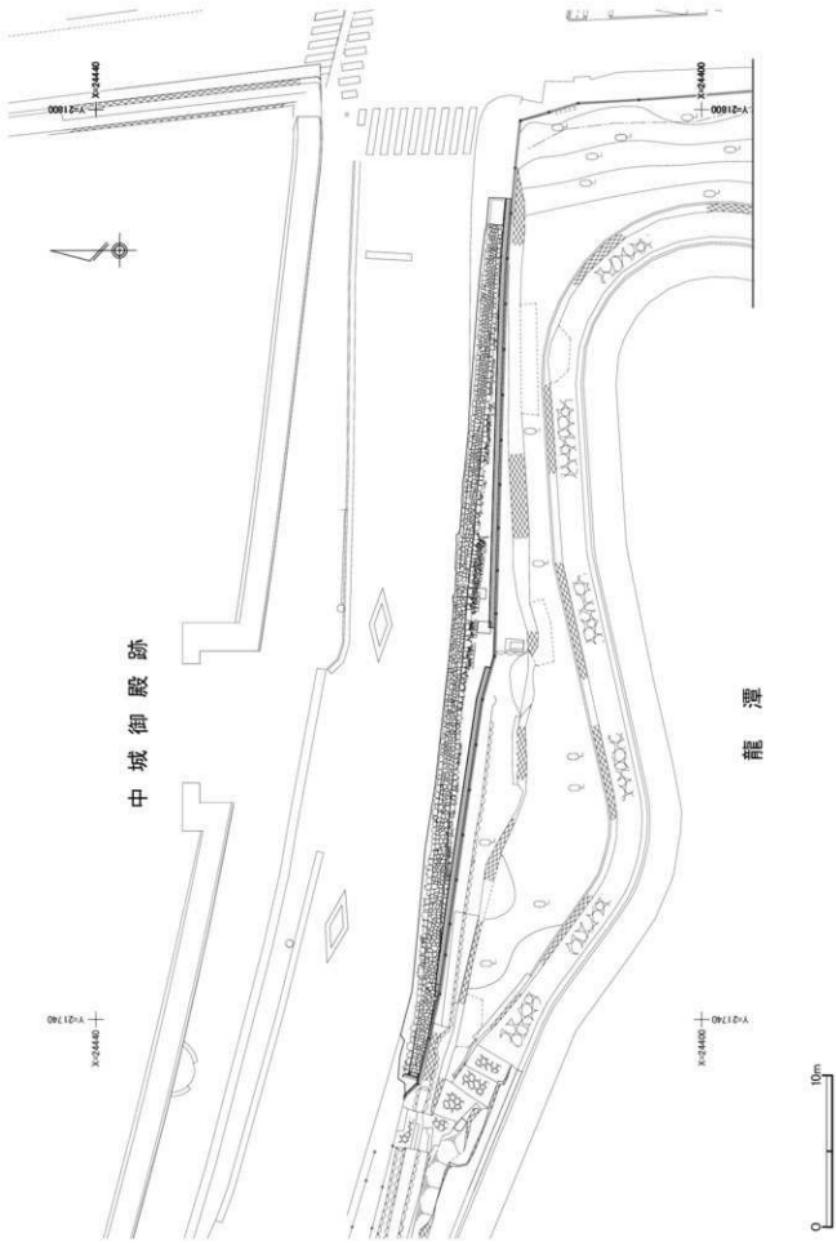
第19図 サブレンチ2調査後の床石復旧状況



第20図 水路遺構を覆うコンクリート製暗渠



第21図 世持橋東側付近に現存する水路遺構



第22図 調査区と周辺現況

第2節 層序

首里当蔵旧水路では、本調査区および既往の調査の成果より大きく4層に分けることができる。ただ、先述のように水路遺構の最上層は現行路面と暗渠であるが、これらは全て工事業者により撤去されたものであるから0層と称した。

0層 路面・暗渠

本調査区は現行路面となっており、そのアスファルトの厚さは約5～10cm、その下層は小礫やセメントを路盤材としておりその厚さは約15cmである。それを外すとコンクリート製暗渠となっており、蓋・溝部分共にその厚さは約10cmである。本調査区においては、暗渠部分には土砂が20～30cmほど堆積しており、常に流水もしくは滯水している状況ではないものと思われた（第20図）。なお、調査区より西方の世持橋付近へ続く部分には龍潭の石垣沿いに石積み遺構が地表に露呈しており、蓋はなくその下部にコンクリート製水路が覆うように造られている（第21図）。

I層 水路遺構を覆う堆積土・造成土

暗渠を除去すると、両壁には長方形状の石を2～4段積んだ石積、その間の床面には一辺の長さ10～30cmの不整な方形の石が敷き詰められた石敷きで構成される水路遺構が検出される。石敷きの床面の表面や隙間にコンクリートや砂が粉状に張り付くように堆積しており、銭貨等が出土した（第24図）。また、後述する龍潭側石積み付近の南側には巨礫混じり土が堆積しており、ここからは瓦や陶磁器、コンクリート片なども出土しており暗渠に伴う造成土と思われる。これらの土層は、上限が水路遺構機能時、下限が暗渠造成までの間に堆積したものと思われる。

II層 水路遺構に伴う造成土

本調査区のサブトレーンチや立会地点で確認された水路遺構の石積みの裏込めや床石の下層にみられる水路遺構に伴う造成土である。造成土は黄褐色のシルト～極細砂で構成され、全体的にしまりは弱い。なお、出土遺物は本調査区のみで、立会地点では出土していない。

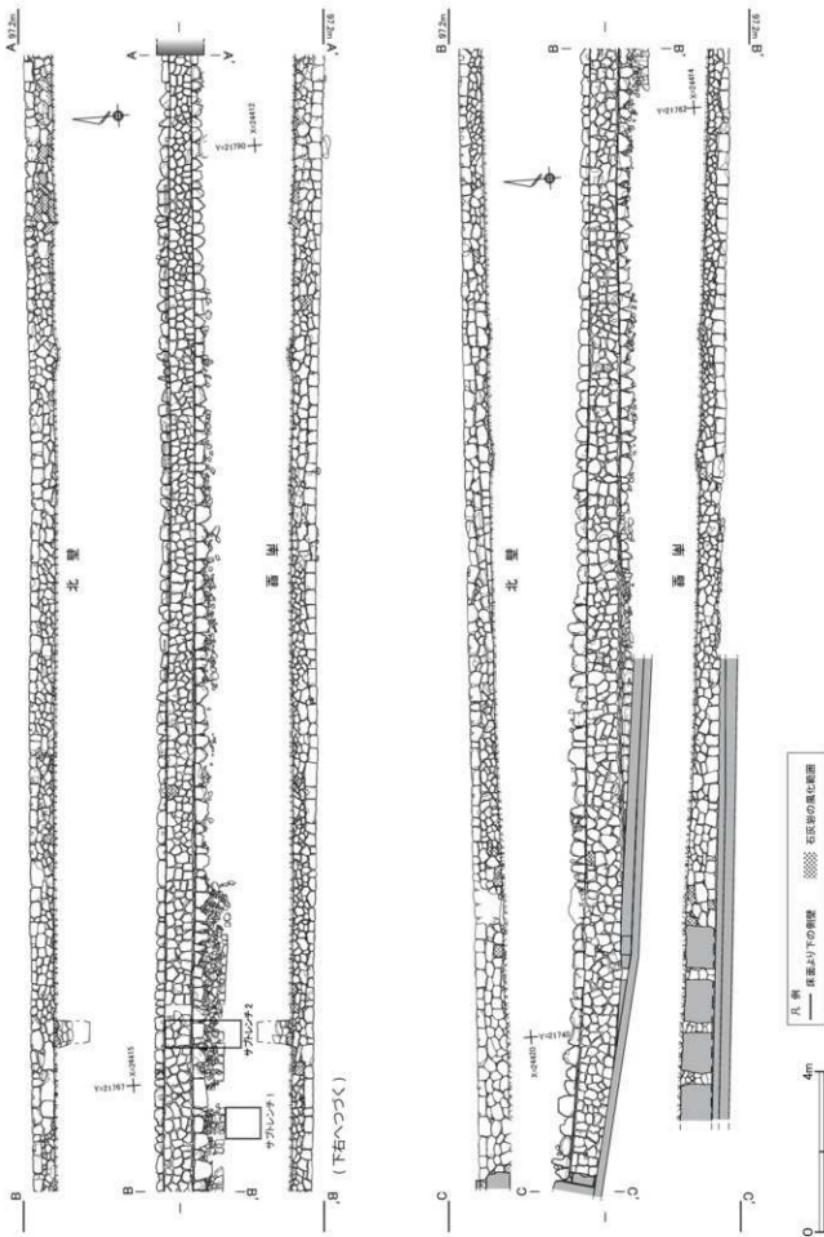
III層 泥岩層（クチャ）

いわゆる地山で、本調査区では確認されなかったが、立会地点や那覇市（H-27）調査区では島尻層群を構成する青灰色の泥岩層（クチャ）が確認されている。なお、周辺の首里城跡や中城御殿跡などで確認される琉球石灰岩やその風化土とされる明褐色土（マージ）は確認されていない。



第23図 調査区全景上空写真

第24図 床面付近銭貨出土状況



第25図 水路遺構全体実測図



第26図 水路遺構全体オルソ画像

第3節 遺構

調査区全面に水路遺構が検出されており、本調査区と立会地点に分けて説明する。

1. 本調査区（第25～44図、図版3～12）

水路遺構は、県道29号線の南側歩道内で東西方向に延びており、加工された琉球石灰岩を壁面に数段積み上げ、床面に敷き詰めて形成されている。なお、南側の壁面はさらに南側へ対応する面をもった両面積みとなっている。以下、水路部分の壁面は北壁と南壁、そして両面積みの部分は龍潭側石積み、その南面は龍潭側壁と称する（第27図）。



規模 今回の調査で検出された遺構の全長は56m、第27図 水路遺構の細部呼称

幅が東端0.5m、西端0.9mと西へ向かい次第に広くなっている。深さは0.6～0.7mの間で大差はないが、床面は部分的に凹む場所がある。床面のレベルは、東端が96.5m、西端が95.7mで0.8mの落差があるが、東から30mぐらいたる96.4m前後と比較的平坦だが、その地点から次第に下っていく。水路遺構はコンクリート製暗渠に覆われながら調査区外の西方に延びて、世持橋付近へ続いている（第14図3、第21図）。

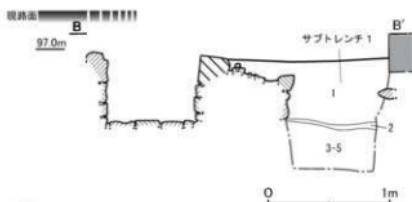
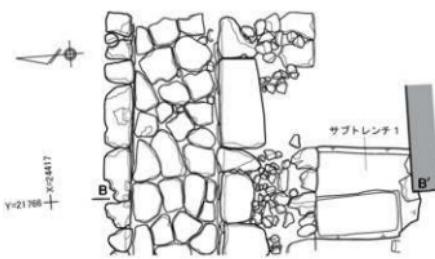
造成 サブレンチ1・2により、壁面と床面の下層の堆積状況が把握できた（第28～30図、図版12）。サブレンチ1では、後述するが水路遺構の南側は両面積みとなっていることが確認され（第43図1）、その上面及び龍潭側壁面は1層で覆われており、水路遺構が廃絶後または暗渠建設時のものと考えられる。一方、サブレンチ1の龍潭側壁石積みおよびサブレンチ2の床石の下層にはII層が堆積しており、北・南壁はその下方の深さ40cm、3段程度の石が積まれていることが確認された（第30図、図版12-4）。このことから、II層は両壁を積み上げていく際の造成土であり、壁面石積みの下方は埋め殺しにした状態で床石を敷いた状況が想定される。このII層は現時点で2つに細分でき、その上層には近世の陶磁器・錢貨・瓦が出土し、次節や第4章で述べるように仙台通寶の年代から18世紀後半～19世紀代の造成であるものと考えられる。なお、水路遺構は最終的に現状保存となったため、北壁を除去してその内側についての調査は行っていない。

壁面 床石より2～4段積まれているように見えるが、サブレンチの状況から床石よりも積まれていることが分かり、調査区西側では床石と明らかに並行せずに積まれた部分も見られる（第39・40図、図版10-1）。垂直方向ではほぼ直に積んでいるが、幅が広くなっていく東端より40mからは1～2°開き気味となっている。

積み方の大きな特徴としては、上段と下段に大きな違いがみされることである。上段は、上面が平坦で比較的整っている長方形もしくは方形で長辺も50～70cmの大きめの石を、横隣りの石としっかり目地を合わせて積んでいる。また、南壁にはいわゆるビシャン仕上げなどと称されるような壁面が非常に平滑な切石が多くみられる（第43図2、図版11-4）。一方、下段は長辺20～30cmの小ぶりでやや不整形な石を、目地の規則的な通りは意識していないができるだけ隙間がないように積んでいる。上段の上面レベルは大きな凹凸がなく揃っているが、接する下段の石のレベルや大きさはまちまちである。サブレンチ2の状況も踏まえると、全体的には下から小ぶりの石で積み上げ、最上段で上面を揃えるように積んでいる。ただ、下段に大きな長方形の石を置いている部分や（第35・36図）、後述する立会地点は造成や積み方がまた若干異なっているなど、細部については各場所の地形などの状況に左右されたことが窺える。

南壁と北壁の違いであるが、一見石のサイズや積み方に大きな違いはないよう見える。ただ、前述したように、南壁は上段の切石が非常に平滑なものが多いが、調査区西端より約14～18mの範囲については、上段も小ぶりの石となっている（第39・40図）。これらの違いであるが、南壁は両面積みの一部であることは既述したが、後述するように検出された状況は当初に構築された状態とは異なっていたと考えられる。

壁面上段の凹み 壁面上段の石には用途不明の凹みが北壁のみに2種類が見られる。1つ目は、石の上面に幅・長さ・奥行き共に5～10cmの方形の凹みであり、壁面の仕上げがやや粗く感じられる石に多い傾向がある（第43図3）。全体的に分布するが中央部に集中する傾向があり、隣り合った石にある場合は50cm前後の間隔で



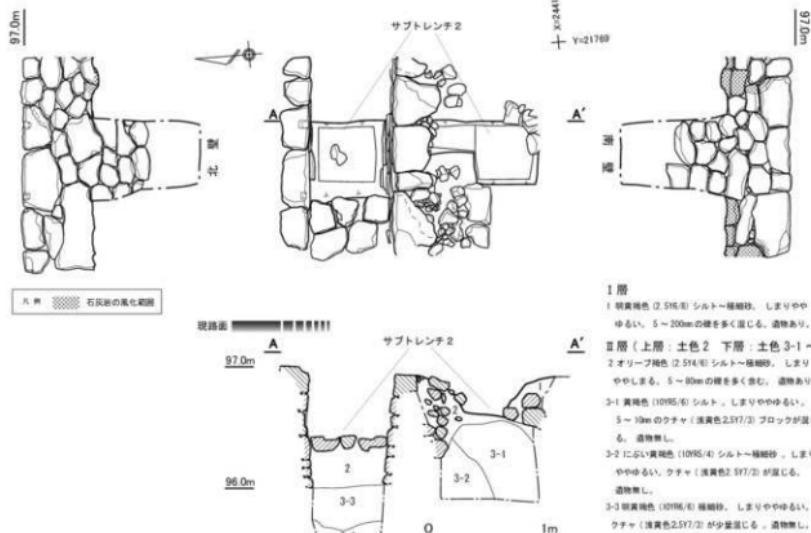
第28図 サブトレンチ1平面・断面
I層
 1明黄色(2.576/E)シルト～種細砂。しまりややあるいは、5～200mmの礫を多く含む。遺物あり。
II層(上層：土色2 下層：土色3-5)
 2オーリー褐色(2.574/E)シルト～種細砂。しまりややしめる。5～80mmの礫を多く含む。遺物あり。
 3-5明黄色(7.575/E)シルト。ややしめる。10～100mmのクチャ(淡黄色2.577/3)ブロックが少量混じる。マージ全体的に混じる。遺物無し。

第28図 サブトレンチ1平面・断面

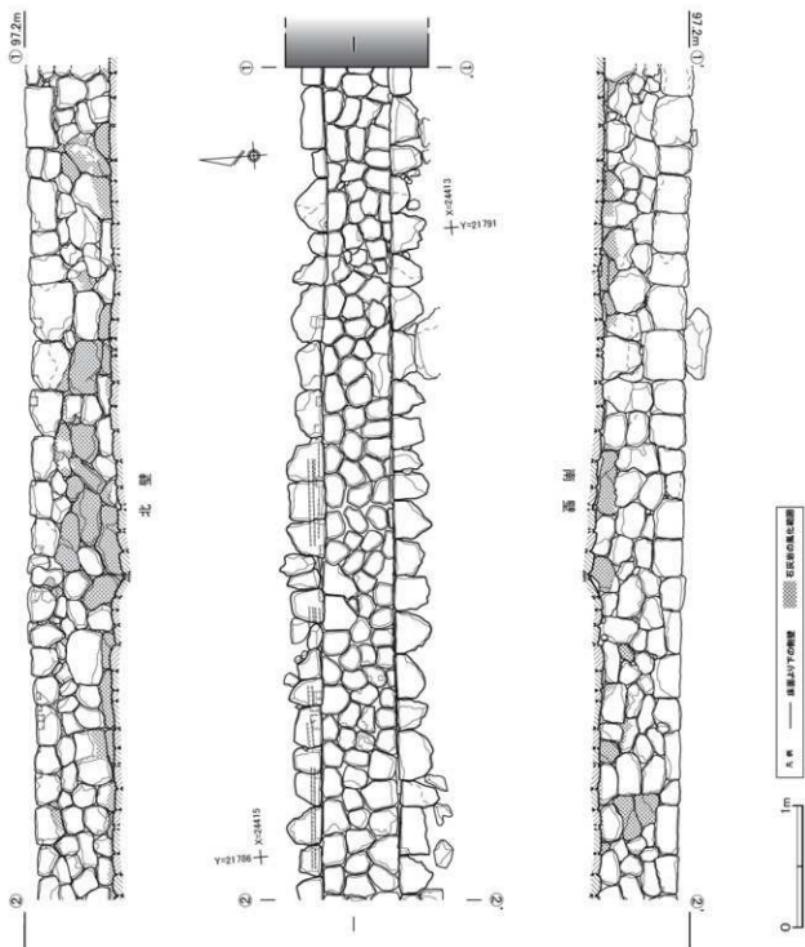
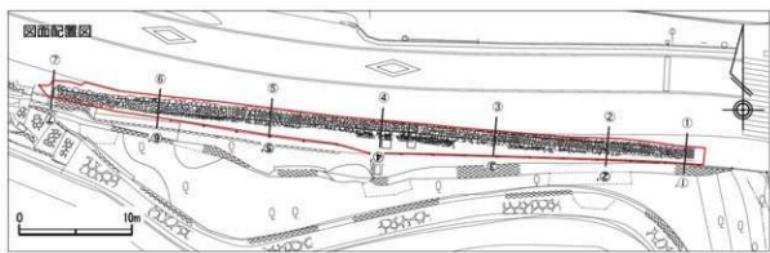


第29図 II層堆積状況

(サブトレンチ2東壁 上：全体 下：南側)



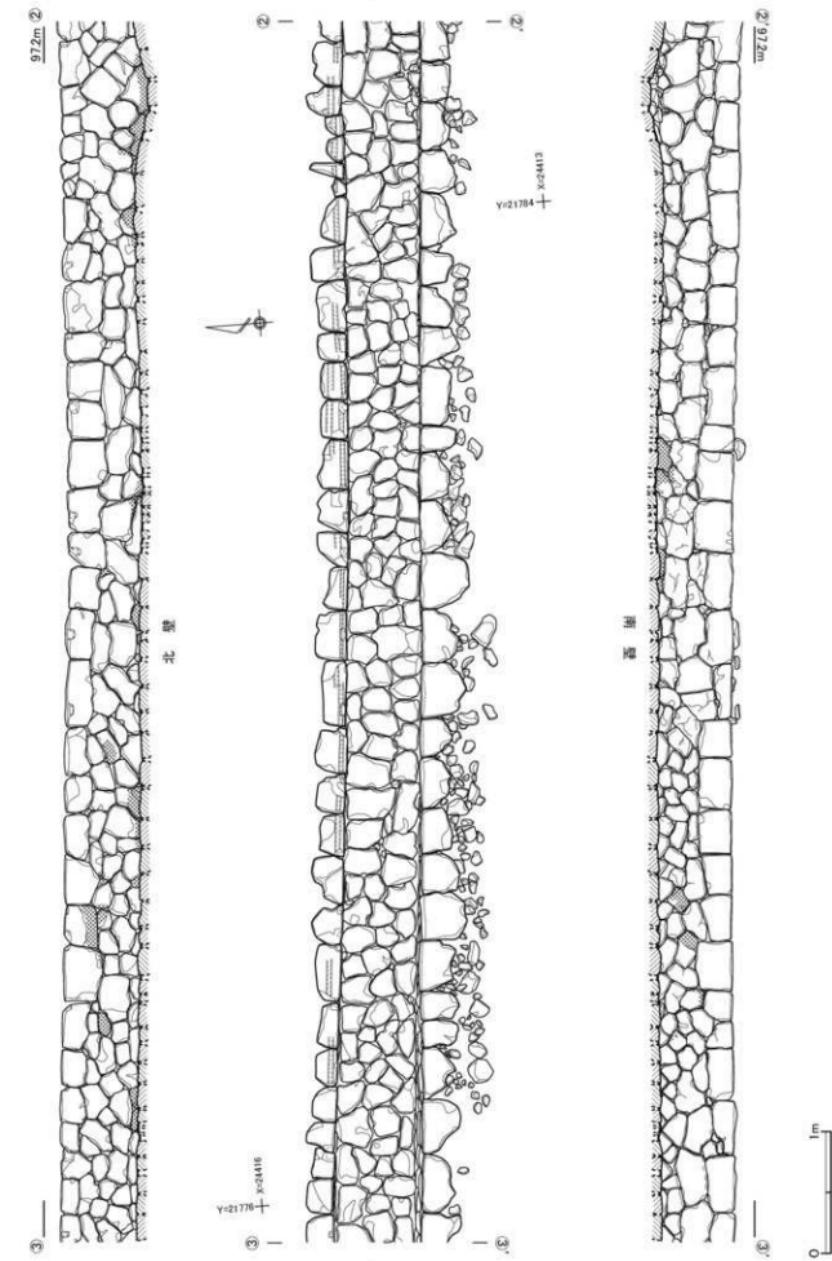
第30図 サブトレンチ2平面・断面・立面



第31図 水路遺構実測図（1）



第32図 水路遺構オルソ画像（1）



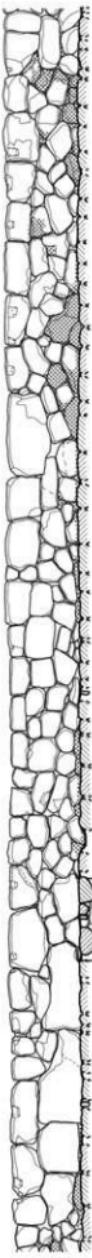
第33図 水路遺構実測図（2）



第34図 水路遺構オルソ画像（2）

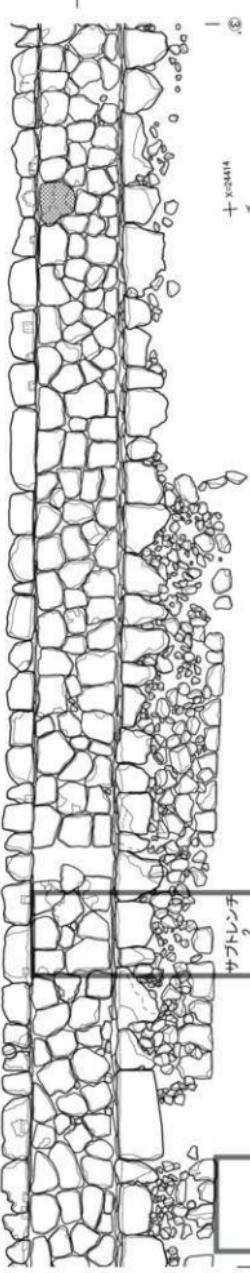
97.2m (3)

(2) -



+ Y=21767
K=21142111

(2) -



+ Y=21774
K=21142111

- (2)
チハントブリ
チ



1m
(2)

南壁

97.2m (3)

第35図 水路遺構実測図（3）

37.2m (3)



X=24417
Y=21767

④ —

北



— ③

南



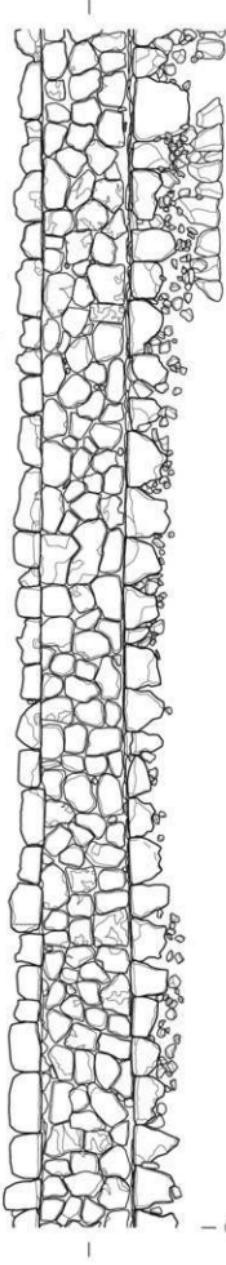
37.2m (2)

第36図 水路遺構オルソ画像（3）

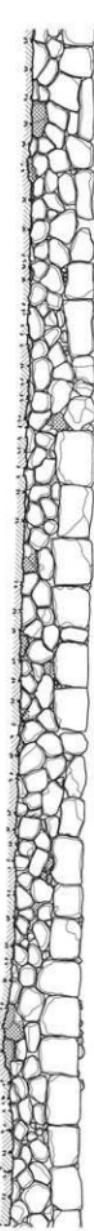
④



④
—
Y=21763
X=11447.0



④
—
Y=21757
X=11447.0



④ 9.2m

m
—
④

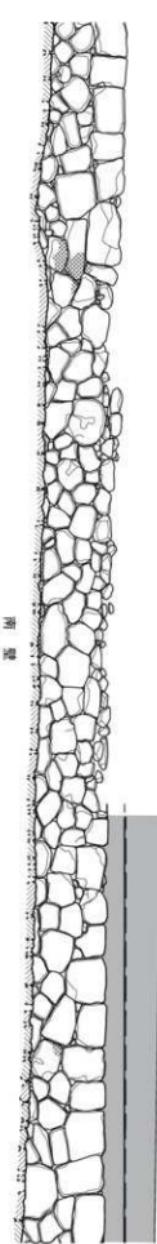
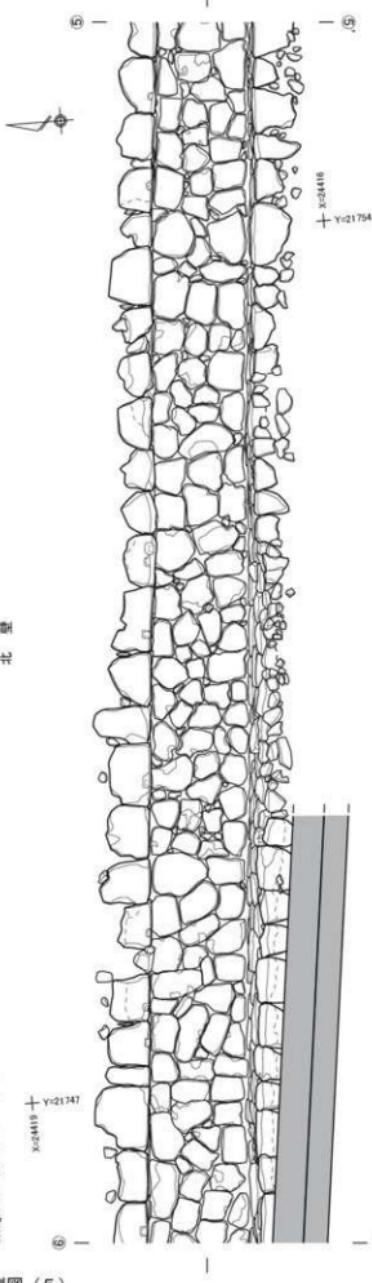
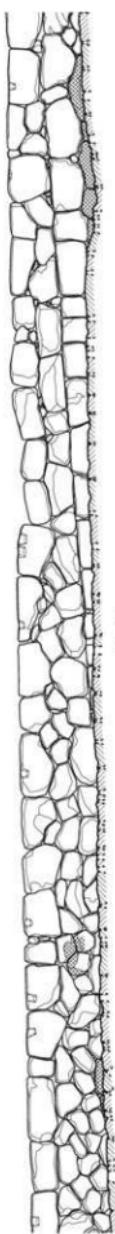
第37図 水路遺構実測図（4）



第38図 水路遺構オルソ画像（4）

97.2m ⑤

⑥



107.6m ⑤

⑥

第39図 水路遺構実測図（5）

97.2m

97.7m

⑤



1m

⑤



第40図 水路遺構オルソ画像（5）

972m ⑥

6:972m

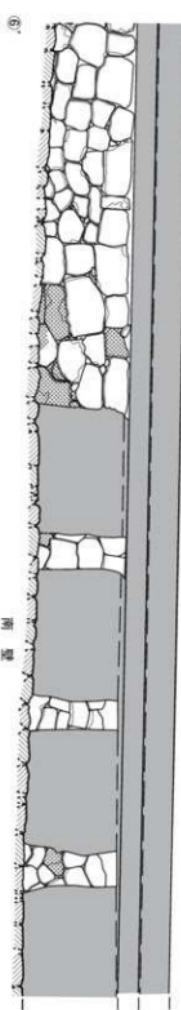
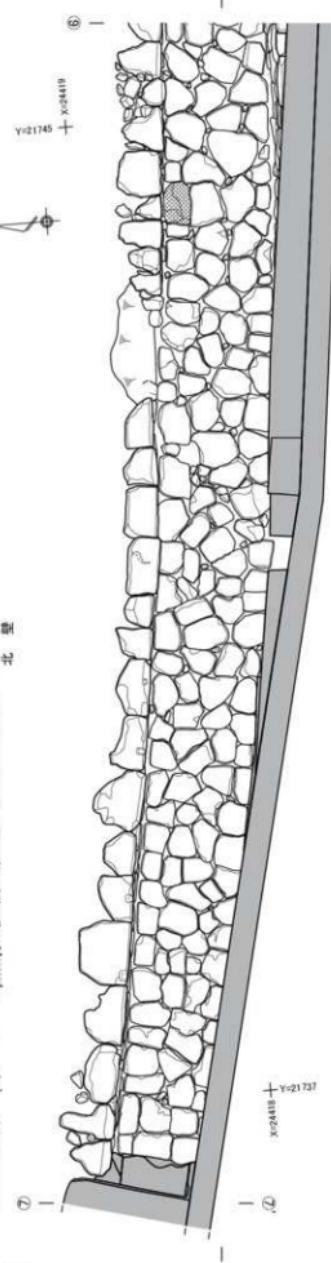
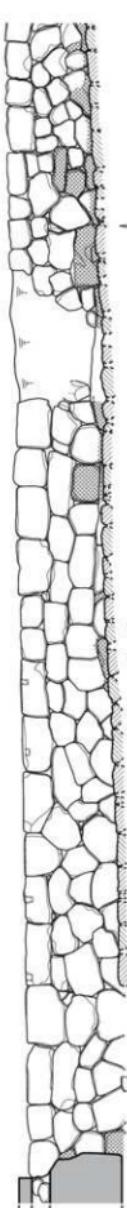
Y=21745
X=1114811
⑧

Y=21737
X=1114811
⑦'

— ⑦'
— ⑥

⑥

南里



第41図 水路遺構実測図（6）

02742

6' 97.2m



第42図 水路遺構オルソ画像（6）



1. サブトレーンチ1検出の龍潭側石積み壁面



2. 機械仕上げが顕著な南壁上段石積み



3. 北壁石積みにみられる上段の方形凹み



4. 北壁石積み上面にみられる縦方向の凹み

第43図 水路遺構石積み細部

見られることが多い。2つ目は、石の上面に、幅5cm、深さ1～2cmで水路に並行する縦方向の溝状の凹みで、調査区東側に集中している（第43図4）。その長さであるが、3・4つの石を跨いで直線的に伸びて1.5mに及ぶものもある。ただ凹みの終始点がみられるものは各石の中央にあることが多いので、これらが全てつながっていたとは考えにくい。先の方形状の凹みとの切り合いは明確ではない。

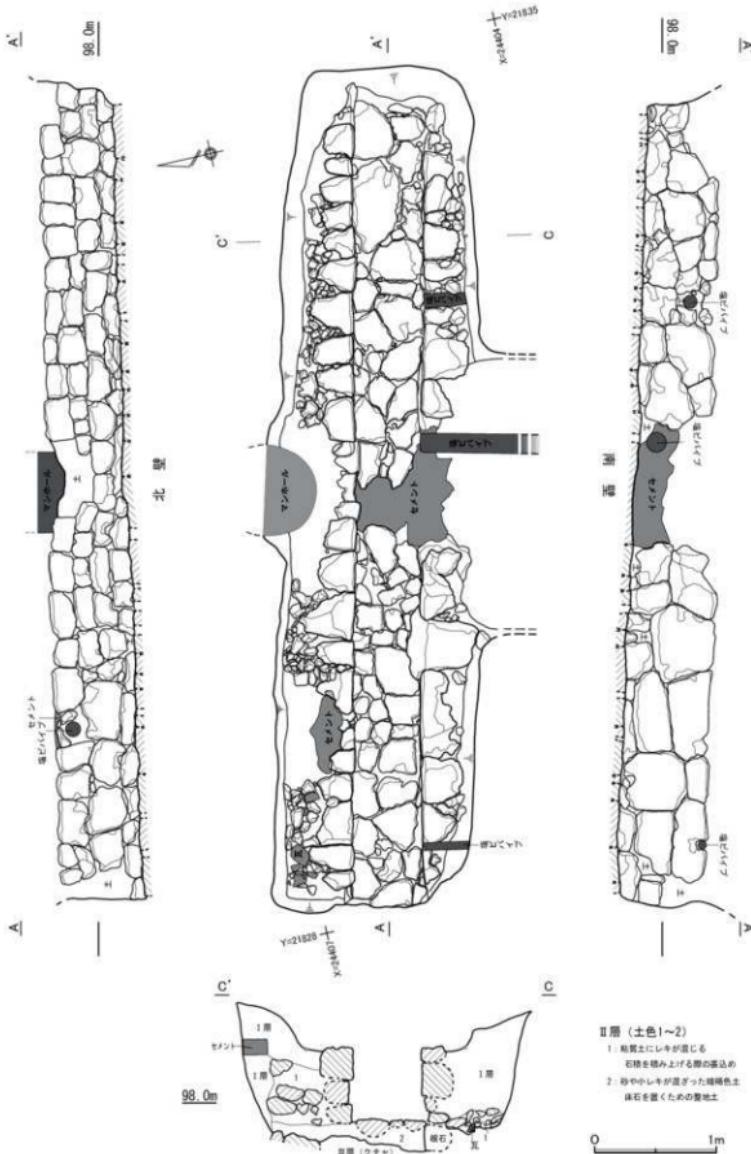
これらの凹みは、前者が方形の木材などを嵌めるため、後者は棒状の木材・鉄管を敷くためなどと考えられるがその性格は断定できない。ただ、南壁はないことについては次に述べたい。

龍潭側石積み 水路南壁と龍潭側壁の間に5～15cmの礎で裏込めを施した幅80cmの両面積みの石積みである。龍潭側壁は現状では2段見られるが、その石は長さ20～30cmと小ぶりでやや不整形で、壁面の加工は水路壁面に比べて粗雑な印象を受ける（第43図1）。第4章でも検討するが、戦前の写真によるとこの石積みは当時の路面より高いものであった（第13図1・2、第54図）。前述のように、南壁の上段はビシャン仕上げといわれる平滑な切石が多くみられることから考えると、戦後に積み替えて北壁と同じ上面のレベルに揃えたことが想定される。そのように考えると、前述した北壁の方形状凹みと同様なものが南壁にもあり、蓋などを支える渡し木をはめるためであったものと推測されるが、現状では断定できない。

床面 1辺の長さが15～25cm、厚さ5～10cmの略方形で上面が比較的平らであるが壁面よりやや粗めに加工された石で敷き詰められている。上面は所々黒く変色しているが、通常の琉球石灰岩である。なお、床面には部分的に長さ1mほどにわたって周囲より5cm前後凹む場所があり、降雨時には滞水していた（第44図）。



第44図 降雨時の水路内滞水状況



第45図 立会地点検出水路構造実測図

2. 立会地点（第45・46図、図版13）

第1章および本章第1節でも述べたように、本調査区東端より東へ30m離れた県道29号線の南側歩道内で行われた立会調査について、株式会社アーキジオによる成果報告書・写真・実測図に基づいて報告する。

水路遺構はコンクリート製暗渠に覆われており、遺構はセメントやパイプなどにより一部破壊されていた。検出された遺構は、本調査区のものと同様に琉球石灰岩で壁面・床面が形成されている。全長は6.8m、幅は50～60cmの間でやや東側が広くなり、深さは50～60cmを測る。床面の標高は、東端が97.9m、西端が97.7mと西に向かって20cm下がっている。石積みは北壁が3～4段、南壁が2～3段と共に概ね横積みしている。石は北壁が長辺20～40cm、南壁が40～70cmとやや異なったサイズのものが使用されている。最終的に横断方向で断ち割りを行い、地山であるクチャ層に10～20cmの造成土を敷いた後で石を積み上げており、本調査区とは異なる造成であったことが確認できた。



第46図 立会地点検出水路遺構オルソ画像

第4節 遺物

遺物は、陶磁器類 77 点、瓦 249 点、その他 73 点の計 399 点出土している（第 1 ~ 3 表）。最も古い遺物として、中国産青磁などの明代の陶磁器があげられるが、戦後以降の I 層からの出土かつ小破片のため図・写真は掲載していない。以下、II 層と I 層に分けて図・写真を掲載した遺物を中心に説明する（第 4 ~ 5 表）。

1. II 層出土遺物（第 48 図-1 ~ 6、図版 14-1 ~ 8）

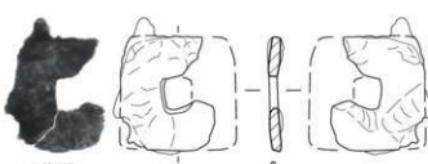
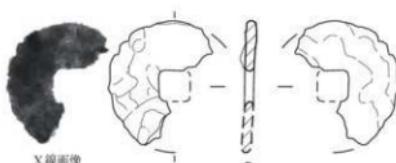
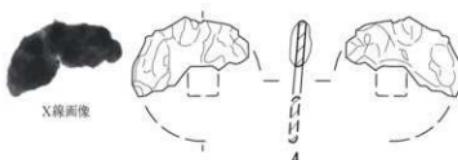
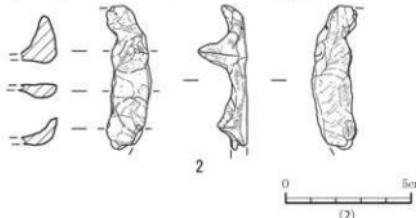
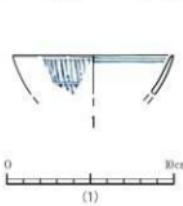
サブレンチ 2 の床面下に堆積する造成土である II 層のうち上層から出土したものである（第 29 ~ 30 図）。陶磁器類は小破片では 20 世紀初頭に下る可能性がある近代磁器も見られるが、概ね 18 ~ 19 世紀代のものと思われる。銭貨については鉄銭が多く出土しており、最新年代は 18 世紀末のものである。一方、ガラス製品 2 点が本層より出土したことになっているが、サブレンチ 2 の最下面から土が付着していない状況で出土したことが写真から窺えるので、調査中に上方から混入した可能性も考えられる（第 47 図）。

本土産磁器（1） 肥前染付碗の口縁で、18 ~ 19 世紀代のものである（九州近世陶磁学会 2000）。未掲載の小片では、砥部・瀬戸・美濃系などの 19 世紀後半以降の近代磁器も見られる。

貝製品か（2） スイジガイで背面が研磨もしくは風化しており、明確な製品かどうかは判断がつかない。
銭貨（3 ~ 6） （3）は寛永通寶。（4 ~ 6）は鉄銭で、鑄のため銭文は不明であるが、その形態・サイズより円形のものは初鑄 1739 年の寛永通寶（4 ~ 5）、



第 47 図 サブレンチ 2 のガラス製品出土状況



第 48 図 II 層出土遺物

第1表 陶磁器類出土数

種類	器形	部位	I層	床面上	II層	小計	種類計	
中國產青磁	明(龍泉)	皿	底部	1		1	1	
	明(景德鎮)		胸部	1		1		
中國產青花	清(景德鎮)	碗	胸部	2	1	3	5	
	清(德化)		胸部		1	1		
中國產瑠璃釉	清(德化)	小杯	口縁～底部	1		1	1	
中國產褐釉陶器	明	盞	胸部	1		1	1	
本土產近世磁器	染付(肥前)	碗	口縁部		1	1	1	
本土產近世陶器	—	胸部	1	1	2	2		
本土產近代磁器	青磁	碗	口縁部		1	1	23	
			胸部	1	1	3		
	白磁	灯明具	口縁部	1		1		
		碟子	—	4	1	5		
	染付	碗	口縁部	1		1		
			胸部	4		4		
沖縄產施釉陶器	色絵	皿	胸部		1	1	23	
		皿	底部	1		1		
	印版	碗	口縁部	1	1	2		
			底部	2		2		
	瓶	碗	口縁部	1	1	3		
			底部	1		2		
沖縄產無釉陶器	瓶	碗	胸部	6	1	8	14	
			底部	1		1		
	蓋	瓶	口縁部		1	1		
			底部		1	1		
	鉢	酒器	胸部	2		1		
			胸部		3	3		
沖縄產陶質土器	鉢	碗	口縁部	1		1	14	
			胸部		2	2		
	鉢	口縁部	1			1		
		鉢	胸部	4	1	2		
	擂鉢	鉢	胸部		1			
			胸部		1	1		
沖縄產陶質土器	鍋	不明	胸部	1		1		
		口縁部	1			1		
		底部			1	1		
		把手	1			1		
		胸部		2		2		
陶磁器類合計		鍋蓋	胸部	1		1	6	
陶磁器類合計			43	13	21	77		

方形のものは初鉛 1784 年の仙台通寶と思われる。

ガラス製品（7・8） 板状製品であるが、その全容は不明だが、近代以降のものであろう。

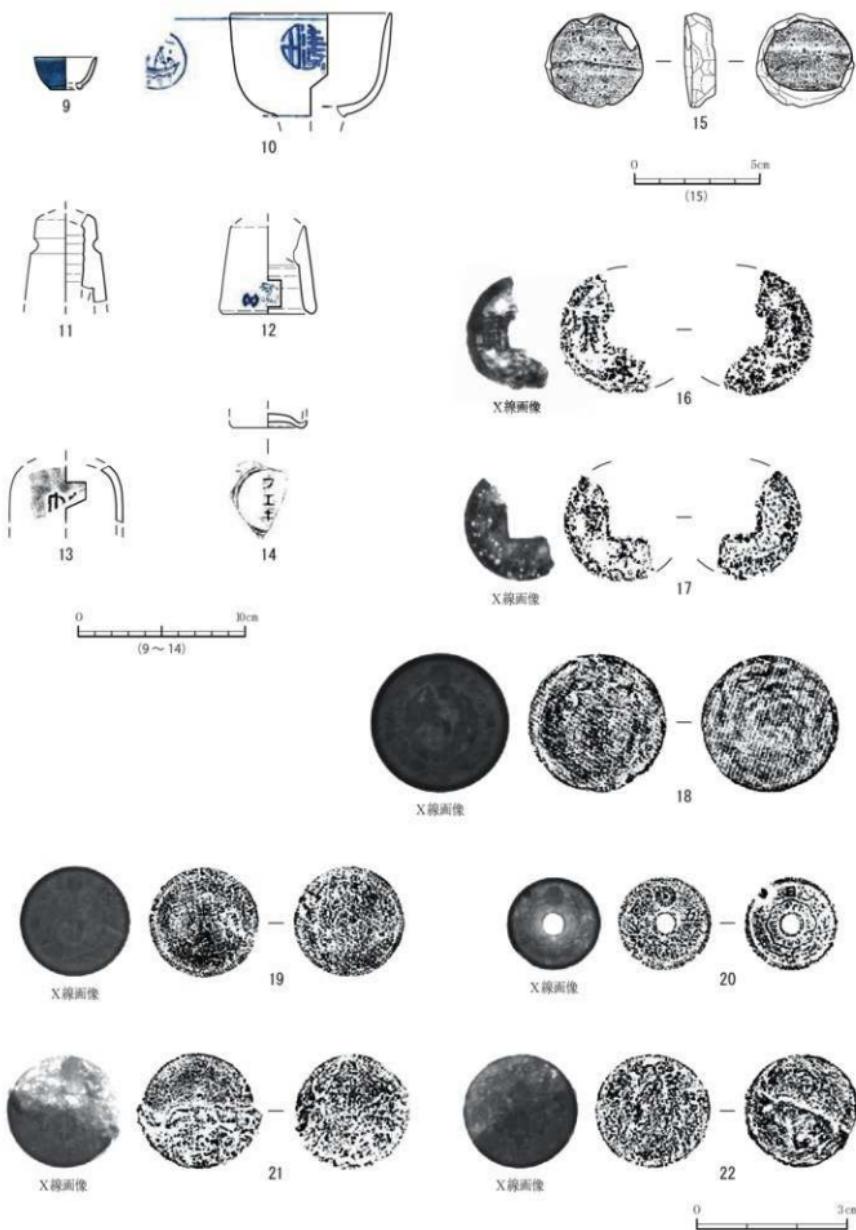
2. I 層出土遺物（第 49 ~ 51 図・図版 14 ~ 16 - 9 ~ 41）

水路遺構を覆っていた戦後以前とされる堆積・造成土から出土したものである。床面直上から出土したものは、出土数・観察一覧（第 1 ~ 5 表）では床面上と称している。ここからは銭貨の出土が目立っており、全て戦前のものである。ただ、暗渠の直下でもあるのでその埋没時期は戦後以降と思われる。

中國產瑠璃釉（9） 德化窯系の極小型の小杯である。

本土產近代磁器（10 ~ 12） 揭載したものは印判の碗（10）であるが、他にも皿なども出土している。（11・12）は碟子で、後者の字款より有田香蘭社製のものである。

ガラス製品（13・14・31） 瓶（13・14）のうち、後者は字款より不易糊製品である。



第49図 I層・床面上出土遺物（1）

円盤状製品（15） 沖縄産無釉陶器
器壺の胴部片を加工したものである。

錢貨（16～22） 寛永通寶は古寛永（16）・新寛永（17）、近代錢貨は明治年製一錢銅貨（18）・明治年製半錢青銅貨（19）・大正十一年製小型五錢白銅貨（20）・昭和年製一錢青銅貨（21・22）である。

掲載以外も含めて12点出土しているが、1点を除き全て床面上よりの出土である。

金属製品（23～29） 青銅製丸釘（23）、合金製球型銃弾（24）、合金製砲弾弾帯（25）、鉄製角釘（26）、鉄製砲弾弾殻（27・28）合金製筒状不明製品（29）である。

乾電池（30） 炭素棒の部分である。

貝製品（32～34） 研磨が見られるヌメガイ剥片（32）、真珠層が露出したヤコウガイ剥片（33・34）である。

明朝系瓦（35～41） 軒平瓦（35・36）、丸瓦（37～39）、平瓦（40・41）で、マンガン釉を塗布したものや、漆喰やセメントが付着するものが見られる。

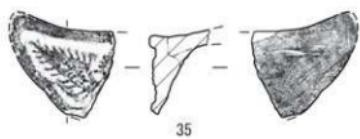
第2表 その他の遺物出土数

種類	I層	床面上	II層	小計	種類計
円盤状製品	沖縄産無釉陶器	1		1	1
	寛永通寶		3	1	4
	不明銅錢		4		4
	銭銅（寛永通宝）			3	3
銭貨	銭銅（仙台通寶）			4	4
	一錢銅貨（明治）	1			1
	半錢青銅貨（明治）		1		1
	小型五錢白銅貨（大正）		1		1
	一錢青銅貨（昭和）		2		2
青銅製品	丸釘		1		1
	—		1		1
金屬製品	角釘	1			1
	砲弾	2			2
	—	1	4	13	18
青銅・鉄製品が付着			1		1
	銃弾		1		1
	砲弾		1		1
合金製品	針状		1		1
	—		1	1	2
ガラス製品	瓶	底部	1		1
		胴部	1	1	2
	—		1	2※	3
乾電池	炭素棒	1			1
漆喰		1			1
土壁		1	1		2
貝製品	ヤコウガイ	2			2
	ヌメガイ		1		1
	スイジガイ		1	1	4
不明獸骨			2		2
石材		3	2		5
サンゴ		1	1		2
その他の遺物合計		16	32	25	73

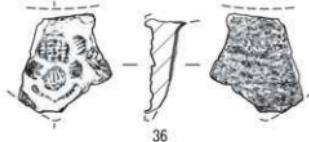
※II層出土となっているがI層などから混入の可能性が高い。



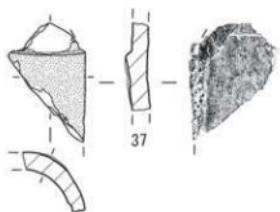
第50図 I層・床面上出土遺物（2）



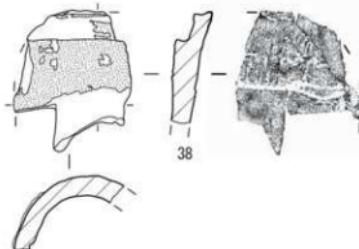
35



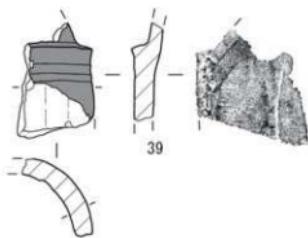
36



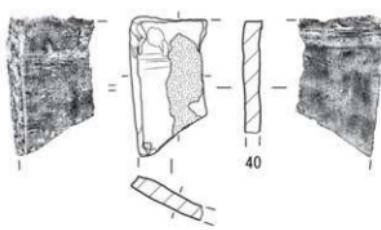
37



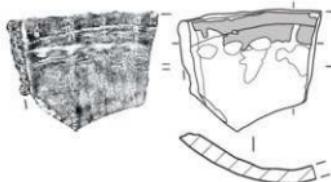
38



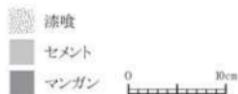
39



40



41



第51図 出土瓦

第3表 瓦出土数

種類	色調	部位	角	I層	床面上	II層	小計	色調計
軒丸瓦	赤色	瓦当	-	1			1	1
	赤色・ マンガン跡	玉縁部	角1つ	1			1	2
		筒部	-	1			1	
軒平瓦	褐色	瓦当	-	2			2	2
軒丸・ 軒平不明	赤色	瓦当	-	1		1	2	2
軒丸瓦・軒平瓦 計				6		1		7
丸瓦	灰色	玉縁部	角1つ	2			2	5
		筒部	-	3			3	
	褐色	玉縁部	角1つ	1		1	2	7
		筒部	角なし	2			2	
		端部	角1つ	1			1	
		筒部	-	1		1	2	
	赤色	玉縁部	玉縁のみ	4	1		5	26
		角1つ	2		1		3	
		角なし	3				3	
		端部	角なし	2			2	
		筒部	-	12		1	13	
	赤色・ マンガン跡	玉縁部	角1つ	1			1	17
		角なし	2				2	
		端部	角1つ	2			2	
		筒部	-	2			4	
				6		2	8	
丸瓦 計				46	1	8		55
平瓦	灰色	広端部	角1つ	3			3	26
		角なし	4		1		5	
		狭端部	角1つ	1			1	
		角なし	3		1		4	
	褐色	筒部	-	11		2	13	7
		広端部	角1つ	1			1	
		角なし	2				2	
		筒部	-	3		1	4	
	赤色	広端部	角1つ	8			8	72
		角なし	5	1	5		11	
		狭端部	角1つ	3			3	
		角なし	4		2		6	
	赤色・ マンガン跡	筒部	-	35	1	8	44	18
		広端部	角1つ	1			1	
		角なし	2		1		3	
		狭端部	角1つ	3			3	
		角なし	4				4	
		筒部	-	7			7	
平瓦 計				100	2	21		123
不明	灰色	筒部	-	4	1		5	5
	褐色	筒部	-	2	1		3	3
	赤色	筒部	-	34	14	6	54	54
	赤色・ マンガン跡	筒部	-	2			2	2
	不明 計			42	16	6		64
瓦合計				194	19	36		249

第4表 遺物観察一覧(1)

遺物 名	種類	器形	分類	口径/ 長軸	器高/ 厚さ	底径/ 短軸	観察事項	出土 層位	出土地点	ナンバ リング
1 本土產磁器	瓶	染付	9.6	-	-	口縁部、小ぶりで浅型の瓶。外面一様部前面に擦状文。内面一口縁際に擦痕2箇。把手4箇。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下	
2 貝製品	-	-	5.8	0.5, 1.95	1.0	スイジガイの背面を研磨もしくは風化。側縫は欠損。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下	
3 銀質	-	寛永通寶	(外2.4)	0.12	(内1.9)	「永・通」は空充て、上方は「實」と思われる。孔径0.6cm、1.2g。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下	
4 銀質	-	銀錢 (寛永通寶)	(外2.6)	0.15	-	円形のため實木銀錢の可能性。孔径推定0.6cm、緒のため厚さは不明瞭。1.6g。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下	
5 銀質	-	銀錢 (寛永通寶)	(外2.6)	0.2	-	円形のため實木銀錢の可能性。孔径推定0.6cm、緒のため厚さは不明瞭。1.6g。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下	
6 銀質	-	銀錢 (山葉通寶)	外2.25	0.19	-	方形のため山葉通寶の可能性。孔径0.6cm、1.9g。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下	
7 ガラス製品	-	-	-	0.5	-	板状のガラス製品。1面には凹凸による幾何学模様で、型押しによるものか?	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下?	
8 ガラス製品	-	-	-	0.35	-	圓面とも平滑な板状のガラス製品。被熱したのか全体的に屈曲している。真珠の薄片が付着。	II層	中央部サブトレンチ2	当水C床下?	
9 中国產 珊瑚礁	小鉢	透化葉系	3.7	2.0	1.7	極小型。	I層	中央部龍潭側	当水C S	
10 本土產 近代磁器	瓶	-	9.7	-	-	口縁部、青色の印刷。複数の円文に落字や船が表現。	I層	西面部龍潭側	当水W S	
11 本土產 古代磁器	碟子	-	-	-	-	上部、白磁製。上方縁部径3.5cm。	I層	中央部龍潭側	当水C S	
12 本土產 近代磁器	碟子	-	-	-	5.8	下部。白磁製。印刷によるKORAN字族。Kを重ねたロゴマーク。有田青磁社製品。	I層	中央部龍潭側	当水C S	
13 ガラス製品	瓶	-	-	-	-	脚部残存部直径6.8cm。濃緑色半透明。褐糞による不明文あり。	I層 (表張)	東部	当水E	
14 ガラス製品	瓶	-	-	-	4.2	淡緑色半透明。正面に攝絆による「フエキ」字状。不規則製品。	床面上	西部	当水W床	
15 円盤状製品	-	-	3.9	1.1	3.8	沖縄産無柄陶器或は陶片を使用。19.5g。	I層	中央部龍潭側	当水C S	
16 銀質	-	寛永通寶	(外2.6)	0.19	(内2.0)	字体より古寛永。小孔があり跡痕にか。薄化のためか表面不鮮明。1.5g。	床面上	西部	当水W床	
17 銀質	-	寛永通寶	(外2.4)	0.18	(内1.9)	字体より新寛永。X幕では多くのものが見られる。1.3g。	床面上	西部	当水W床	
18 銀質	-	一錢銅質	2.8	0.16	-	明治年製だが年号不明。6.7g。	I層 (表張)	中央部	当水C	
19 銀質	-	半錢青銅質	2.2	0.14	-	明治年製だが年号不明。3.3g。	床面上	東部	当水E床	
20 銀質	-	小幣玉銀質	1.9	0.12	-	大正十一年製。孔径0.35cm、2.1g。	床面上	中央部	当水C床	
21 銀質	-	一錢青銅質	2.3	0.09	-	昭和年製だが年号不明。2.8g。薄化激しく剥落あり。	床面上	西部	当水W床	
22 銀質	-	一錢青銅質	2.3	0.19	-	昭和年製だが年号不明。3.3g。	床面上	中央部	当水C床	
23 青銅製品	釘	-	3.0	0.3	0.5	丸釘。0.7g。	床面上	西部	当水W床	

第5表 遺物観察一覧（2）

遺物 No.	種類	器形	分類	口径／ 長軸	器高／ 厚さ	底径／ 短軸	観察事項	出土 層位	出土地点	ナンバ リング
24	合金製品	鉄弾	—	1.1	1.1	—	球型。背面以外の合巻と思われるが不明。6.4g。	床面上	中央部	当水 C床上
25	合金製品	銅弾	—	2.5	0.3	1.2	弾薬片。4.7g。	床面上	西部	当水 W床上
26	鉄製品	釘	—	7.7	0.5	1.2	角釘。13.7g。	I層 (表孫)	中央部	当水 C
27	鉄製品	銅弾	—	5.7	1.1	2.0	弾薬片。48.9g。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
28	鉄製品	銅弾	—	8.3	1.1	1.9	弾薬片。62.3g。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
29	合金製品	—	—	9.5	0.2	1.7	筒状製品。何らかの把手か。	床面上	西部	当水 W床上
30	乾電池	—	—	5.5	0.8	—	炭素棒。4.4g。	I層	東部龍澤側	当水 E S
31	ガラス製品	—	—	—	0.7	—	直面が直線なので、方形の容器か。内底面がギザギ ザ化。	床面上	西部	当水 W床上
32	貝製品	—	—	1.5	0.3	0.8	スノメガイ剥片。内面から腹縫にかけて研磨あり。	床面上	西部	当水 W床上
33	貝製品	—	—	4.9	0.2, 0.7	3.0	ヤコウガイ剥片。表皮の一部は剥離され、真珠層が露 出。	I層	中央部サブ トレンチ1	当水 C S T 1
34	貝製品	—	—	5.5	0.3, 0.8	2.9	ヤコウガイ剥片。表皮の一部は剥離され、真珠層が露 出。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
35	明朝系瓦	軒平	褐色系	—	3.5	—	牡丹Ⅱ一天界寺B（石井分類）。	I層	中央部サブ トレンチ1	当水 C S T 1
36	明朝系瓦	軒平	褐色系	—	2.3	—	牡丹Ⅱ一天界寺B（石井分類）。軒平即内部から破断 面にわたってセメント付着。	I層	中央部サブ トレンチ1	当水 C S T 1
37	明朝系瓦	丸	灰色系	—	1.7	—	外面底部に接種付着。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
38	明朝系瓦	丸	褐色系	—	1.9	—	外面底部に接種付着。玉縁共3.6cm。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
39	明朝系瓦	丸	赤色系	—	1.9	—	外面全体にマンガン塗装。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
40	明朝系瓦	平	褐色系	—	1.7	—	内面中央に接種付着。	I層	中央部龍澤側	当水 C S
41	明朝系瓦	平	赤色系	—	1.6	—	内面底部にセメント付着。	I層	中央部サブ トレンチ1	当水 C S T 1

第4章 総括

ここまで、首里当蔵旧水路の発掘調査成果について報告してきたわけであるが、既往の調査成果や写真等資料を踏まえて整理することとまとめたい。

概況 首里当蔵旧水路は、上流である東端がかつての蓮小堀付近、西端は今回の調査区から延長して現存する水路までとみると、全長約400mはあったと思われる。この水路は戦後まで使用され、最終的にはコンクリート製暗渠として存在していた。戦前の空中写真からみると、水路は道路の南際を走っていたと想定するとほぼ直線的な水路であり、世持橋の北側から大溝(ウブンジュ)に合流したものと考えられる(第52図)。蓮小堀(リングムイ)と直接につながっていたかどうかは不明だが、道路の側溝としての役割が第一にあったものと思われる。一方、立会地点では南側からパイプ管が水路に突き出るように検出されており、南側の屋敷地からの生活排水も流されていた可能性も考えられる。

また、今回の調査区においては、水路の南壁は龍潭側と接した両面積みの石垣(石積み)となっており、路面より1m近く高いことが戦前の写真に写る人の背丈などからも窺われた(第13図1・2、第53・54図)。ただ、検出された南壁の上面は北壁と崩っており、戦後に積み替えられた可能性が指摘できる。また、北壁の上段には方形状の凹みが見られ、時期などは不明だが蓋などがあった可能性も想定される。

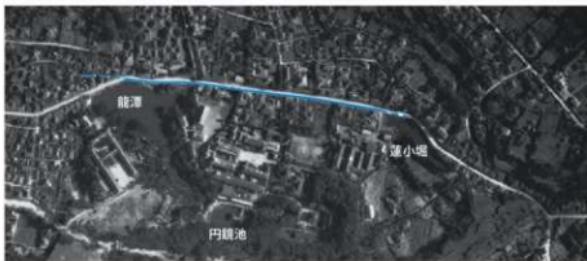
技術 水路は壁面に石積み、床面に石敷きにより造られており、その幅・深さは部分的には違いがあるが、全体として平均0.6mであった。なお石積みは今回の調査区では造成土によっていたが、立会地点や那覇市調査区で見られたようにほぼ直接地山であるクチャ層を掘り込んで構築するのが大勢であったと思われる。

水路の土木的な機能を検討するため、今回の遺構の全長56m、深さ0.6m、比高差0.8m、勾配1.4%のデータから、土木工事の設計で用いるマニニング式で計算すると、空石積みと判断できる本水路の流量は秒速0.6m³、流速は秒速1.7mと算出された(埋蔵文化財サポートシステムによる)。それに倣って、最も東端の那覇市による平成27年度調査地点⑥のデータを用いると(第3・9図)、ここから今回の調査区西端までとして全長350m、床面104.8mから計算すると比高差9.1m、勾配2.5%となり、やはりほぼ同じ流量・流速となった。つまり、本水路は全体として一定の比率を持って排水路として構築されたものと評価できる。

構築年代 水路の造成土であるII層の出土遺物から見ると、その上限は仙台通寶がキーとなる。この仙台通寶は1784年から1787年の間に仙台藩で鋳造されたが、大阪などにも流出したものとされており、1806年に幕府は取り締まる触書を出したとされる。つまり、上限は18世紀末~19世紀初頭とやや幅をもたせた理解が妥当と思われる。ちなみに、仙台通寶は東北地方を中心に、兵庫県神戸市楠・荒田町遺跡(神戸市2014)、広島県東広島市鏡東谷遺跡(広島大学2003)、宮崎県西都市三納城跡(西都市1996)などで出土している。

次に下限であるが、陶磁器類では18~19世紀代のものが主体である。ただ、小破片のため未掲載であるが、印判手のものがわずかに出土しているので20世紀初頭に下る可能性は否定できない。また、混入の可能性があるとしたガラスであるが、時期的には20世紀以降の可能性が高いものと思われる。

一方、下限の検討には古写真も重要である。現在確認できた龍潭の写真で最も古いものは、1901年刊行『日本名勝地誌』に掲載されたものである(第13図1)。この写真では電柱が写っていることから、日本における電気の普及が1880年代とされるので、撮影年は1900年に近い時期と思われる。ただ、龍潭側の石積みが確認できるが、水路そのものは写っていない。



水路と思われるものは、沖 第52図 首里当蔵旧水路の位置(米軍1945年4月5日撮影・国土地理院)

繩の現存する最も古い記録映像とされる、大阪の松蔭女子専門学校の朝輝記太留が1929年8月に首里城・沖縄師範学校などを訪問した際に撮影した、16ミリフィルムに収められている龍潭付近の映像で見られる（第53図、沖縄県立博物館・美術館所蔵 仲地1999、廣兼・木原2016）。また、これより時期は下るが1940年刊行の文献に掲載されている中城御殿正門から龍潭方面が写された写真には、石積みが見られるが、その前面に見られる木々の影が途切れる状況から、その間に水路があった可能性が推測できる（第54図）。

このような状況から、まず20世紀初頭には既に水路が存在していたとができる。そうすると、構築の上限は仙台通賈から18世紀末～19世紀初頭に遡る可能性もあるが、銭貨の流通は陶磁器類などより長期に至ることも多い。

そのように考えると、中城御殿が1870～1873年の間に建設されたということを踏まえて、水路も同時期の18世紀後半ごろに構築された可能性が歴史的に妥当性が高いと考えたい。

今回の調査で検出された首里当蔵旧水路の遺構は、世論の反響を受け関係者の協力により現状保存することになったが、首里地区にはまだ見ぬ文化財が埋もれているものと思われる。ただ、今後も頻繁な開発が見込まれる本地区的文化財を保護していくためには、住民や開発部局などへその重要性を周知していくことに付け加えて、文化財側から活用についても積極かつ多面的に検討、提案していく必要があろう。

参考・引用文献

- 石井龍太 2006『琉球近世瓦の分類と編年～琉球近世瓦の研究その3～』『南島考古』第25号 沖縄考古学会
沖縄タイムス社 1983『沖縄大百科事典』
沖縄県教育委員会 1995『龍潭・ハンタン山』沖縄県文化財調査報告書第122集
沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料』
角川書店 1986『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
神戸市教育委員会 2014『楠・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書』
西都市教育委員会 1996『三納城跡・穂北城跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書24
田山花袋編 1901『日本名勝地誌』第11編 博文館
仲地洋 1999『沖縄県公文書館(映像部門)』『NFCニュースレター』第24号 東京国立近代美術館
那覇市教育委員会 2017『首里当蔵旧水路～龍潭線街路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～』
廣志保・木原成一郎 2012『朝輝記太留(1878-1938)の米国体育視察と行進遊戯教材の普及に関する研究』『スポーツ教育学研究』第1号 日本スポーツ教育学会
広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 2003『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書1』
平凡社 2002『日本歴史地名大系 48 沖縄県の地名』
柳宗悦 1940『首里と那覇』『工芸』103号 日本民芸協会



第53図 龍潭沿いの水路か（朝輝記太留 1929年撮影『体育行脚・沖縄之巻』 沖縄県立博物館・美術館蔵）



第54図 中城御殿正門から見える石積み（柳 1940）



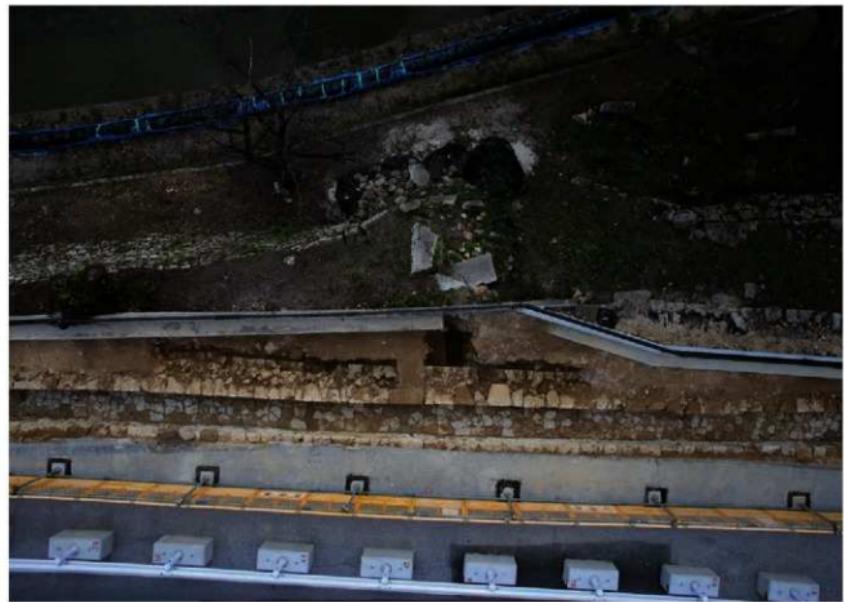
図版 1 龍潭と首里当蔵旧水路（上空北より）



図版 2 中城御殿跡と首里当蔵旧水路（上空南より）



図版3 調査区全景空中写真



図版4 調査区中央部空中写真



図版5 調査区近景（1）（東より）



図版6 調査区近景（2）（西より）



図版 7 水路遺構近景（東より）



図版8 水路遺構床面（東より）



図版9 水路遺構中央部（西より）



1. 西部付近北壁（南より）



2. 中央部付近（東より）



3. 北壁上段部の加工痕（南より）



4. 北壁上段の切石（南より）

図版 10 水路遺構石積み（1）



1. 中央部付近（南より）



2. 中央～西部付近南壁



3. 西端付近南壁



4. 中央付近南壁

図版 11 水路遺構石積み（2）



1. 西壁（東より）



2. 南側石積み裏込め



3. 東壁断面Ⅱ層堆積状況



4. 石積み南壁

図版 12 サブトレーンチ 2



1. 全景（西より）



2. 石積み南壁（北より）



3. 石積み断ち割り（西より）



4. 石積み北壁（南より）

図版 13 平成 29 年度工事立会地点水路遺構



図版 14 出土遺物（1）



图版 15 出土遗物 (2)



35



36



37



38



39



40



41

图版 16 出土遗物 (3)

報告書抄録

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第106集

首里当蔵旧水路

—龍潭線街路整備に伴う発掘調査報告書—

発行日 令和2（2020）年3月25日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL：098-835-8751・8752

印 刷 有限会社 ベンギン

〒900-0004 沖縄県那覇市銘苅1-11-9 九正新都心ビル2F